

弘識錄

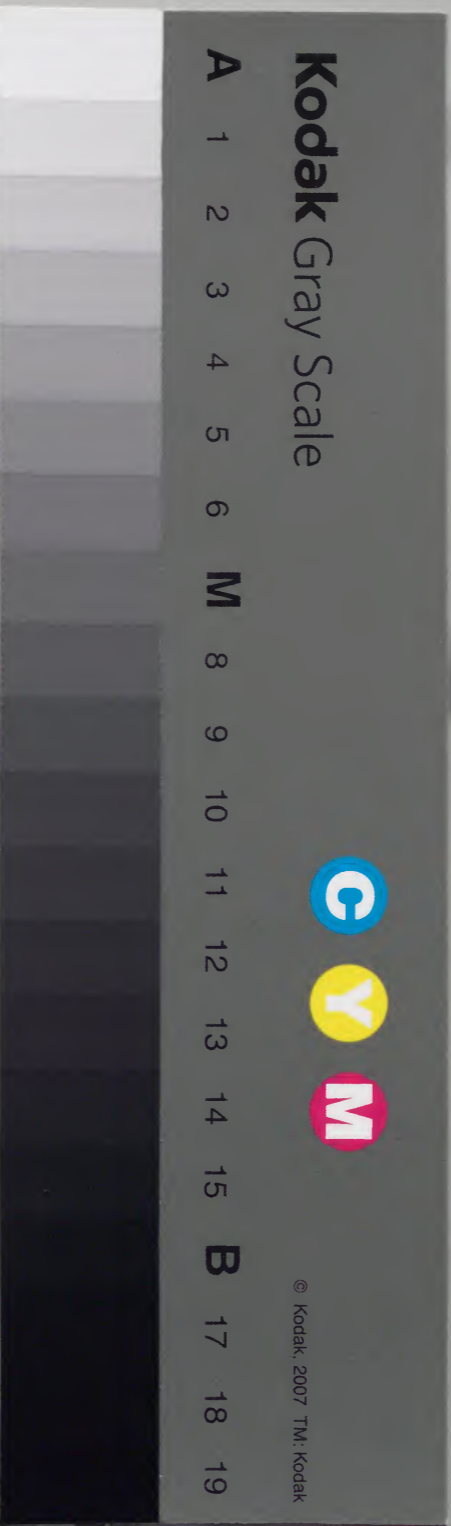
和書門

和書門	類	一八五三號	二函	四冊
-----	---	-------	----	----

內閣文庫	和書	八八五三號	四冊	三架
------	----	-------	----	----

內閣文庫	番號	和 18853
	冊數	4 (3)
	函號	214 12

共四本



漢書文庫

法尚真中書之康

大金聚轉共圖觀想之研麻磁里

餘者少

俱鳳皇不隱其色尚俱吾子其新其

而魚俱效豈不夷其能為其集如柏

情欲殊大俱機機不至其故附畢

彭海泉

割胎殺夭、則麒麟不至其郊、竭澤而漁、則蛟龍不處其淵、覆巢破卵、則鳳皇不翔其邑、何則、君子違傷其類者也。

九金聚粹、共圖魑魅之形、孤劍埋

光、尚負斗牛之氣。

呂惠卿之表語也

淺草文庫

玉葉

元曆元年世中さわうく、仍け美、平行盛備前の通式、
とて、檀浦と申す、八月十五、秋月よりあきた、
暁正忠度朝臣を諸とも、に仍け、
中、
全快法師

獨の浪洲にや、多月、
昔の友、
平行盛

平行盛



諸君に、
浪のうに、
平行盛、
法中忠快

平行盛

逃し、
余の、
平行盛

一箭貫雙鴈

弓贊

平勝睿

雖好用弱弓

一發輒吞羽

威敵且斃獸

敢比源賴義

釣臺

月君唐姪

掉頭豈為耽江海加足何心傲帝王



寛政三年八月十五夜郡羊臣進献詩歌

良夜といへば題少く奇奉きこと

仰以蒙りて

松平越中守源定信

四の海波乃如母以池水の最中の月を志すもあまき
いと涼みの道も到りけりて明しけき山代小つらあつ月影

松平和泉守源兼光

金城夜色倚崔嵬三五登臨百尺臺萬里祥風回玉坐一天
明月高僊盃歡声豈獨晴光賞詠思非縁揺落催竊
善千秋雲霧淨桂輪長與德輝開
月清秋の最中此影小つらあつ月影

戸田采女正藤原氏教

くもりぬ交心代の光や好むにふくこよびの月のさやけき
照勢猶その名も四方小影満ち今宵代秋の夕さき此月

同

京極備前守源高久

秋風も静小四方此空晴て名小くあけ秋九月りややれ

堀田梅津守紀正敷

さやけきのついで望しも秋の取れ 何とや月の盛にすむらん

今宵代心代はすきたん秋の夕さき山よす名も月影

良夜といふころ心代人こよびのやましとらこころの

おとの葉たてふらぬさき

今宵代

加納遠江守藤原久周

名小なる月をてあき多敷小いまとてりあふ葉云の葉もふく
つらさ心代もえととく千里志よ名小く月もすむらん

かここれ名もくちあよの月影代ゆくのけ多君のめくこい

八月十五秋

仰こし有りてよみこし

六角裁前守廣孝

秋こよびつこのあも君代の光もふく月りこよび

同

大友武部大輔義経

名にわ今宵此月も豊とりの田のむにわ川家初鳥の声

良夜小奉りとも思誅三首

横瀬駿河守貞臣

改ししも望嶽中の秋此あけけよ心代の光も月小もらん
いふ光り名もあけ此秋も望きとらも不むさしつふ
あけ望らよひの月をてらとら云の葉んりてまこえあけは

八月十五秋奉り

六角伊豫守廣常

中秋霽色掛城頭玳瑁高庭漢月留群士列候爭奉賦
古今賞會仰風流

河子や志い名お月ハ秋めても君を光く有る 母は

良夜(一) 題以功

松平在京院種社

秋の志月もさういひてはし 次は多道の心さうけり代小
寂中多る月も名高き富士の根のつもまき雪の影ふてはら
母ははらばら木は梢ふらふらの影のたれる秋の秋の月

牧野備前守源忠精

河まはけは代の光をまは鏡 向ふも情 望月は座
うらまはしと誰と仰えん 望月は座の望みぬ 望月や君代秋
武蔵野や口もさういひてはし 望月は光のまき雪の影ふてはら

良夜

有馬兵部大輔唐春

月明千萬里、坐客露沾衣、可酌清尊酒、如何良
夜稀。

十五夜月

織田主三頭信由

曇りけり月のみ火や母は池水ふすみて各々望月は座の望み

良夜の歌つらふ

仰こも有る

よみかき奉りし

吉良元京義隆

望月もわきて情もかき空も河もけり望月は座の望み

久世丹後守

碧空雲霽九門前、宇宙風清三五天、月出海濤光若
湿、人嗟山閣事堪傳、文尊舊典周家俗、詩講新詞漢代
篇、闌興未央催曉色、民竈早已起炊煙。

右良夜作應

教

久世廣武再拜

同

おふいふふこの葉をさし花露にふる名にて夏月のうけの隈のき
先をさし秋のつゆののち夏も代たてり夏を月のうけ

同

石野遠作中原康道

まきし花影もほろり如月の根花高にこほひ月花名もて
名に高に今宵と月の光とハ寂中花秋の空ふこほひ

森山源常孝盛

とくつとくとも今宵の月小のしほり多し秋のうけ
今宵とてめは夏月の代の名もさしこほひやわく諸人

石川六右衛門忠房

いつるも秋のうけ影も今宵の月花又多く心も
こほひ猶もしのこと葉花光もさしこほひのうけ

根岸肥前守

大王風起白雲開、萬里江山明月来、叢桂露鮮掛珠玉、長
流潮満濃樓臺、偏憐良夜蟾宮趣、誰比當時梁苑才、深識
聖恩天地遍、小堂秋興自雄哉、

右應良夜

教

根岸鎮衛再拜

佐久間甚八茂之

月出西園風色清、高秋玉兔自長生、金精揚彩懸銀闕、
桂子飘香滿鳳城、背燭正開文酒宴、捲簾遙聽管絃
聲、良宵共仰光輝遍、萬國衛恩樂大平、

大林與兵衛親用

九天繁露桂花開、偏賞嬋娟命酒杯、穆、光輝明宿

鳥清、風籟拂霽埃、升平遠勝周成德、吏治不如陶侃
才、唯惜分陰將努力、今年良夜去無來

良夜といふ題は踊りて

藤原親用

よる川も千鳥の外れはなほも曇り、思代は照る月、け
諸人の心にかゝる色、帝ももきて名にあふ秋の秋は月、
すゝもつゝ流るゝ魚ももてえそ、まはせりよれ月影

同

村垣元太史 軼文

ひとすらの雲も、そは名ふしあふ最中の秋、小玉の月影
まゝもこゝこゝも雲もかろもきて、又とらふお月影の秋

良夜

大久保内膳忠貞

名に高き秋の秋は月の、つよもも、
の月影は、
の月影は、

ものぬの八十鳥、ひて晴り、夏最中の月、は、多雲も、
秋、同詠良夜、應、教和歌

秋、同詠良夜、應、教和歌

内藤甲斐守正範

上

涼秋三五月、輪盈玉露金風、萬里清、作賦侍臣、知幾々、南
樓不讓、庚公情

良夜といふ題は、踊りて、
道も、舟も、あな、
思ふ、口も、任、

誠、小、小、若、波、の、種、小、と、思、も、も、之、
思、も、も、口、も、任、

兼原伊豫守盛貞

幾秋も、は、は、は、月、の名、ふ、
月、こ、よ、ひ、く、ま、る、き、
月、こ、よ、ひ、く、ま、る、き、
月、こ、よ、ひ、く、ま、る、き、
月、こ、よ、ひ、く、ま、る、き、

良夜とつゝ題と多由つて 池田筑後平源長惠

四の海千里のわも角しをよよの月桂秋伴嶋山

又多くをわのれ青もふつれ安世にすむ月の秋の中空

下陰小露のめもさびたけりてきつ今宵此月秋の言の葉

恭應

教同賦良夜月

勝田安藝平藤原元忠

仰見中秋月清輝北夜長雲晴繡綫聞風度珠簾香

澤厚恭仁訓情和謹寵光敬陪高殿上露氣瓊筵涼

かいつ世にわてらめしり 飄象の月の秋は洲こよし照そら

老原や分うささるる秋の秋地瑞穂てうあふを月桂うけ

こよしあやけつをまを是たりと雲もささるる澄のほる月

てりりささるるを空たは川はさるるつゝ秋三居の秋を月影

千代くま松のち枝の露れも秋こよしれ月さあふてやも拜

露のほあふのにしき折ちて萩も盛に月もを秋秋

澄もささるるよひの月さりてささるるも剛等うり明や鈴虫

千代のち何ふりてはし今宵此月小露の清声

てのちやさし虫音も晴ぼりさし此月のささるるさやけり

ささるるささるるささるる秋地田の露のささるるささるる

咲あめを離の葉もささるるささるるささるるの月桂あふ

武原のちの尾ふり葉の白も月桂ささるる今宵此月

照月のち思ひあふりて今宵も松の葉も影ひささるる

くぬらふを秋又嶺ささるる遠きささるるささるる月影ささるる

照る月松の葉代ささるる秋響城のささるる月影ささるる

月影ささるるささるる

序略

北村季春

言の葉にひそけはる秋の月こよひハワきそつちあたらけ

こころの 仰きとほれしとて唐のちき種

ひかきしとて勢とりたにえ何てとて多きけりや

山光くもれ露のそそぐもみふ辰申は秋の露

こころのこころ有るこころ思ひつけれや

近藤吉盛の志郎

わすれぬ月々今宵の言は葉にやとて道は走らふこれ
くもる夕ま空の月ハ八千種の神の露の影やとて

右哉申寺定信三万の由にとも 禁途より入

東史四百九十一日奉此條下に乾通九年附明州細首

以方物入真云我 高倉帝 美安三年のり

小松重盛 今以宋帝にたるとて之るハ小松のりや

豊大閣とての大徳寺にあり 信長王の進薦の會

以設け 天朝小請り大政大臣の贈安ふりての勢

猶一寺以建て香火の地と執りて以款りて額以

請奉りてまじりてのハ

正親町天皇宸翰以深き勢守り大平山天正禪寺の

号以賜りて物多以身榮花に誇りて後よの半

口まきとるこころ分りて其勅額今小大徳寺内

惣見院に有りて分ん

三代實録四十六 光孝帝元慶八年九月廿九

丙戌出羽國司言今年六月廿六日秋田城雷雨

晦冥雨石鏃二十三枚七月二日飽海郡海濱雨石

似鑱其鋒皆向同四十八仁和元年秋田城中及飽
海郡神宮寺西濱雨石鑱陰陽寮言當有凶
狄陰謀兵亂之事神祇官言彼國飽海郡大
物忌神月山神田川郡田豆佐乃賣神俱成
此怪出宗同四十九仁和二年出羽國飽海郡諸
神社迎雨石鑱云々又本州綱目十石部霹靂礎
條下曰雷雖陰陽二氣激薄有聲實有神物
司之故亦隨万物啓蟄斧鑿礎鎚皆實物也若曰
在天成象在地成形如星隕為石則雨金石雨粟
麥雨毛血及諸異物者亦在地成形者子必大虛

中有神物使然也陳時蘇紹雷鎚大九斤宋時沉
括干震木之下得雷楔似斧而無孔鬼神之道
幽微誠不可究極云々續日本紀集和六年出羽國

八月廿九日田川郡西濱連府の徑五十余里

とある石あり去十三日雷雨甚安十余日以輕下
晴て石なる多付小落る石あり其鑱小似鉞小似
或ハ白く或赤く云々予は祖傳も鑱斧鎌の白黒
赤灰色あり又太鼓地撥の形あり地紋も上りて繪
くまらりやりのあり多端小玉有る誠小形判りたる
うてしきふと教種蔵したまひて印子のころ是なりと

● 出羽國羽黑山麓南荒澤と云ふ小橋有りと擬室
珠のこゝにて作巖岡城下山王社司富樫千盛羽黑山權現ハ
延喜式神名帳四州郡三座ノ中伴氏波神社ナルニ

● 奉建立出羽國羽黑山麓脚橋

施主 直江山城守兼續

文録二年己丑月吉日

天下一道仁作

● 伊豫國温泉郡戸部村に之有る昔大森茂七

盛長より居るを承て其の奥行今に有りと云金蓮寺

今に有りと云 唯須賀達庵使使者長坂三郎左衛門會長會我部盛親及其臣中總右衛門於八幡村里献之
賜黄金二百兩於三郎左衛門 年譜 創業記 駿府記 長坂三郎 元龜百録 浪花戦記 白松平庵史 談海傳之

● 大坂落城後長曾我部官内少輔盛親ハ圍攻の事

かき居りて生捕りて其の首を大坂に送る

右徳公長曾我部脚橋可成河召きて可系と上意を承り

脚白洲へ引く事多し繩取に石谷十藏外小使人尻各失念繩

二箇少引く事多し長曾我部ハ本綿給紙着多し殊亦身使少

又少引く事白洲小使ハ引く事多し其の事ハ十幾引合て

千時近江とハ脚尋ハ盛親ハ一子の太刀多者多し自害と云

き事多し其の事ハ脚尋ハ盛親ハ一子の太刀多者多し自害と云

臆し多し脚尋ハ胡の軍ハ少勵て勝利得多し

後の軍ハ赤備の出合にて譜代の士七十八射り射り敗

軍を足取し其の事ハ脚尋ハ盛親ハ一子の太刀多者多し自害と云

討死す多し自害ハ勢多と聞きて之近臣又其部攻む事

盛親承り其の事ハ脚尋ハ盛親ハ一子の太刀多者多し自害と云

ヤラヌ其園意、再人救成催、耻辱成雪、幸極云外に感
其時井伊掃部頭長曾我部前へ進出岳大高に成て、先程夜中赤信
と、其備へと被申、長曾我部聞て叔父左様、此うさうと、残念之
仕合と返答し、其後ハ山尋被成事も無きて、石洲成引立
糸へ出、首成刻ら多きに寤り、埃の心之に強く話し置
同公千力の軍を成守り、暫く有、山折安山黒米飯う成
高く盛、赤鯛の成成菜と、す由多、長曾我部是成て
勤番の内にお、多き者向、て源成を、被申ハ昔、
名阿安ちめ成の、解と、多き事例多、ハ、
何、成らに成、
何、仕成、終、
何、
何、

通、
と、料理仕、座鋪へ入、
と、御臺へ、
座鋪へ、
は、
は、
人、
物、

上野勝豊話
寛文三年九月十一日年七十九歳

越前黄洲公 既小以遊、
さ、
遠、

高麗陣の節秀吉公御母堂不例小依、
名古屋、京小

十五歳長曾我部盛親果其首於三條河原 難波戦記後筆戦記係三音今從殿前記細記慶長記松葉記

漏りたる海上志の瀬にて御船瀬の岩洲に當てるを肘の
毛利宰相秀元小舟に馳勢て来り既小舟へ潮入供奉の軍
色派失ひ勸搦すとも秀喜動し不終秀元曰下
此舟に移りたるは西度途中にても移り不終秀元
帶守當家の刀脇差に服て船中に投捨舟を不頭に付
可成居有らせハ宰相急の勸仕をく神妙として則小舟より
に下りたるは

関原礼後毛利豊前守土佐(遠嶋)小被配りて妻子其小佐
一にふり大坂御一戦乃催傳聞て或夜妻小云らふハ家罪有
て配流勢り罪なき妻子に遠出波濤の事しき有らる
事のさきり成るに事皆ふに詰りて亦云らば思立り
有りとも云の葉に

因今更不可歎妻夫小随つ成に候ありとす史の云成関人小豊
前守曰我武名氏傳て既に六代片境の波濤より成に候
此等の願ひ一命氏秀頼に奉るを思ふとも我姑嶋成出付ハ
定不國守取て妻りきりての憂るを人云て因成居る妻別
て弟ていそ勇士に當るの妻別多の成に候人ハ姑嶋出舟
武名氏にきりて人君の以爲家地候心歸候に候に候
いとも成あひを親子とも北嶋の之を波小成む一君の遠
目出度頼て違も人志記之とて送り立受豊前小成りて
小舟に掉り大坂に候終に籠城しける其後國守對馬守
豊前小奉行成添りて守と奉 上聞 神君関臣勇士
等者ハ志嫁婚の事なり豊前の妻子ガも罪す人といふ

故に對馬守妻子を城門へ入るべしと欲せしむる
福嶋左馬次正則は武功小よりて藝州小封執りて廣嶋小在城
分りしよりく不係して人殺はるに樂と執り有付道中
石を舟の上の咎ありして廣嶋城門矢倉小入きて食代を
了時其近臣の思代得し茶道有り此者罪なり何れ其
に成多しと云ふくくしに初毎に握食代持来せしに右
近臣其茶道を呵り流し家罪なりて此は分り汝食代持
る君正則の丹に入し我より重罪小當多し我其未安食
代喰しりして命の多し流し食代絶して死勢小志
早く巧備し再反に来るるを云茶道曰君と同し重
罪に多し不可悔多し罪に當りて既小殺多し既時君

の救にて命多し一たり思代得て思代不知人より君弱き
意代生して我より食代空しく治るる代臣聞て物に人
勢人よとて是代食代毎夜来り食代何れは聊おとす救
口過て正則櫓に入置し者ハ定死し多しをたし
た顔をもたしとてはとてに多し誰に食代送し高にやと大
聲あけて也くく其時彼茶道遠由り私食代贈りては
正則色代愛し獨指小し汝何れに食代をさす
茶道云ふむ罪代得て既小殺しに定り多し時彼其身
にありて申開し今口より命分りては思代報ん為小
夜毎に食代をくく正則聞て怒り涙小流代在り
近臣の罪代免して矢倉より出り茶道より更代感し多し

源頼義主曰軍中にて若武者ハウチヲ多ク馬に乗先成かせ
かり見よ一老武者ハ走馬に万の勢に及又足^りし^く
刀控徳ハ鏡成^るく楚劍槍成^て軽ておほえて勞さ^るめ^く
志^て重^大成^好ハ刀分^きも何^を勞^多く^あと^を人考^へく
治世に救運の者成^活多^戦ハ股引肌若^き美麗^小あ^ら其
武者^少氣高^くい^ふみ^え足^と一乱^士にハ刀脇指^へら^にも其^幹
常^分ち^りし^一如何^少と^分ま^いハ^落人^と分^多付^甲冑^成多^槍
敵^の雜^人少^も交^りや^はき^しと^一す^て是^具足^本武^けけ^しも^出ま^ハ
行^のハ槍^の柄^成踏^をな^し或^ハ矢^成瓜^{より}て^立へ^し
大勢^の行^る兵^多ハ^矢出^きま^さく^未ま^の人^にさ^き立^ても^放
ま^ても^兵多^しも^負て^も卷^こま^にけ^ば其^場成^穿鑿^の時
少^りの^もき^るも^一

味方敗軍此時ハ五人も十人も云合^て奔^道成^退べ^しに^之歩^立
に^あり^ても^左右^を敵^少く^軍勢^もの^優成^りけ^しに^必
遊^んで^おも^の口^に轉^るも^一は^塔の^口

大將^も負^たす^時ハ人^必大將^少心^成け^け敵^成多^事故^猶更^に
戦^負こ^のも^の抛^きハ^少川^敵成^防戦^成り^肝要^に
馬^上に^て敵^を槍^にて^攻合^付ハ^真向^胸板^成穿^付ハ^自然^槍
と^はし^て成^りて^靴成^りも^多く^あり^しは^むも^成穿^りも^多ハ
何^の一^勝成^空成^人に^あら^るも^必馬^にハ^あら^ず
敵^成す^も一^は一^の口^成べ^し

馬上^少先^成は^受る^り互^に槍^し合^程分^は足^好
自由^に分^らる^多成^りけ^しの^備と^も先^馬の^頼首^成

槍にて守川へ一雷馬武突ふも驚き口く尻馬小に互
る馬を引ひるなりあつちへ
馬上にて敵武槍つけ突たしなりとして何とて下馬は
く馬武乗出りて二槍も三槍も突く公安の首武
取きし強情者ハ多分も勝武奪きしなり
互に歩立に分りて槍武合は多付ハ中付内曹切其上を首扱ハ脇下
れらふも肝要に突ふも敵武突出きた多付ハ槍柄武
折て岳へ石分武取てつんと先へ投捨へ必歎倒る
ものも其付はくもて折て首武と互へ
組撃ハ肝要に下のつりてつてむべし口は切るなり
其付痛由急利武得多しとて

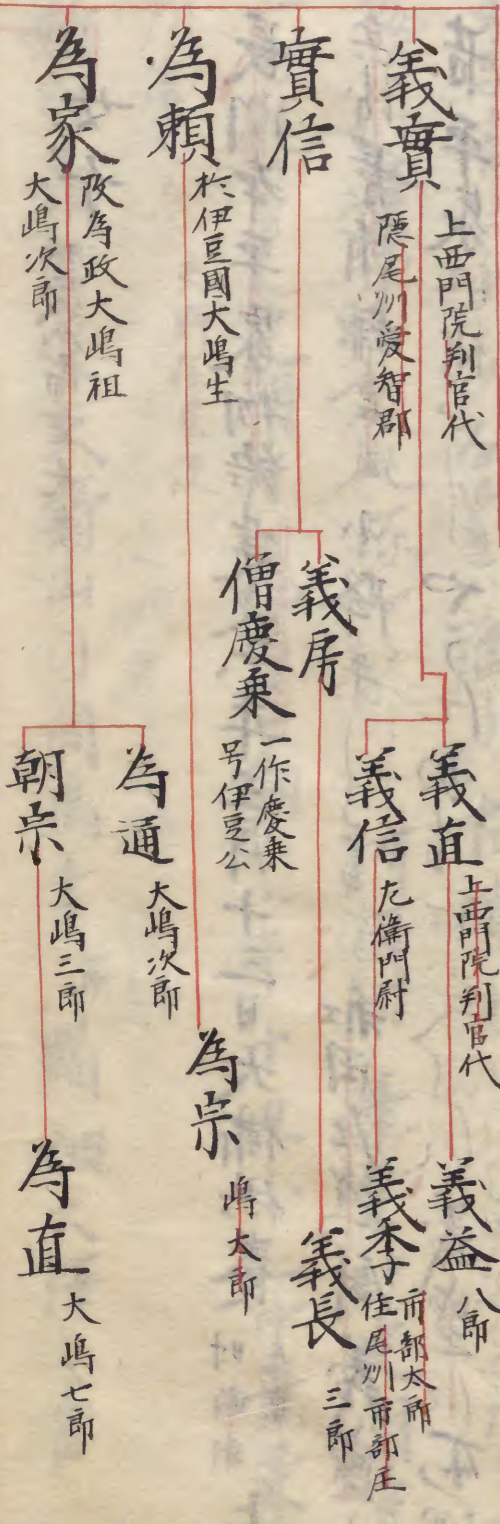
敵と取舍槍武合突山崩えんも多付槍の長短は多不
崩きにくきよの櫛多し槍の對にも互不武目當に
とて突りて互へ
も武武水に元々く大にたはれし戰場少く息切ら
付面武方く元武武もあつちへ鎧胸小環あ多し其科
分り白淺意し一信深ハ水武あつちあ
城乗或ハ敵の長槍乗上戦んも多付急也也声武互に何れ
其付ハ聲武立べり必息も多し者之既小声の止る多付急声
武一分聞也急うに何け又肝要の言武もあつち
鎌倉大双紙曰新田殿ハ去永徳の以進信濃武大河原也
少不たに少く隠きて有る多武武中皆肖中官武始

め新田の一門浪合にて父子とも二人打もつる事新田忠信の子忠政少補
 奥州へ逃下り岩城の近不洞也といふ所に隠れし小山
 若大丸の乱より奥州より安堵せし未列小忠の行箱出
 のらく厩倉といふ所にて本質彦といふ者と頼て隠き多し
 如何して聞せし事家に下作下の任人藤田といふ者思来り應
 永十の四月十日新田忠信舟入道行啓厩倉山中にて打死
 其賞として藤田より厩倉本質彦に賜り上杉彈助ハ
 属して安藤と改名しといふ新田入道行啓武藏守義宗子 按らば其合記に新田
 忠信守義則厩倉小死一應永十九年六月七日有鎌倉大双紙
 に應永十の四月廿五日厩倉にて死しと有伝濃官傳小忠應永
 十年四月十日忠信合記の説終りし事物れとも其合の合戦

義則打死の後、大双紙小忠合軍地後義則厩倉小死一説
 やうに書とる誤り也

尾張國愛知郡名護屋城南古渡村小為朝塚と呼不り、
 高森小為朝の靈代崇祀といふ、今ハ八幡と稱せり、當國ハ源家
 由緒の國々其、その為朝古渡也、其知行勢も、一也、

● 畧系



女子 加茂六郎重長妻

長川平家物語建久六年三月十三日大佛供養 時頼朝 在京 上総悪七

景清景清鎌倉成小降糸 和田左衛尉義盛小預

昔平家に依せしやうに物も 義盛に依りて

一座成せめて 互に記おし 縁地政に馬引

八田彦尉知家に被預後大仏供養の日 同七年

二月七日湯水成とありて 日向宮崎郡竹篠

東大寺にて大流のこと 薩中務といひし者

保曆間記中にあり 頼朝

五節景清は東鑑十二にあり 世人

景清八嶋以述て尾州熱田大宮司 のり

尾州葉栗郡飛保村 西に河田村

長九尺半 尺六寸

鈴小 似

文字書 誰

何田村 葉栗

二所 乾

新田義助遣 天野山門

天野信景

英賜畑大澤

書

書

書

書

書

書

三上刑部少輔右屬干義治令隱謀于敵欲討之研送令集知其意報相謀干

舟田安經去月十二日於安經之管令

泉首三上足才之榮委細令達畢誠無

二之忠義其感殊多可論賞其功勿

論也先附告達之脚力感賞之狀

如件

與國元年十一月二日 義助判

天野備中守及

山内二所入道及

河島四所三所及

右古感書天野信景家傳藏備中守名經政

肥後國任人野大出而家光官上彦二賴

次仍而属于義治之後令隱謀通路之

昔察知之今曉一人宛被討取之各律

妙之至誠其感不斜候追而可

賞其功者也

與國元年十月五日 義助判

畑 八所及

大澤彦五所及

右古感書尾州名古倉大澤氏藏也

按了仁 後村上天皇即位元年小一之於時義助告野

に亘り周大曆神明鏡櫻雲記等南方流傳詳に世に
所考分一右二通感書同業是蓋義助自所筆之

肥前國佐賀^{鍋島}近江里に川上といふ処有る其地少頃

育者老翁といふ皆屬差代指傳多里俗流設鎮西八節

為朝九洲少有一口其村小右蛇僅て人取事一久

八節強弓大矢以彼蛇射物に其矢蛇以射物

川上明神の森分楠小立一蛇川の底小流に流

音右河の一刃といふ水にあり彼死蛇小繩と身

引上りし久後世に至り其里の音人ハ一刃以事

之り二三十年其彼社の大楠一枚打朽に其木中に

大の盾股鏝有る凡す一丈一方八九寸も有りて中

公為

尺余も有りんと云々社人の云傳一為朝の矢以

楠小射止めしと云々是れ一是れ一

祠小納しと云々其時見傳し長崎人の物語せし

祥細院耕雲魏公ハ南朝補佐の臣也

後龜山天皇御北遷の後終ふ他主小仕へり

塵世といふも花頂の霞小伴雲水漂泊の客と云々

始南方奉仕の時嘉喜門院周防といふ女房以賜り一甲

子以生氏周防を天野備中守經政と云々

以子といふ後に工藤管内補重貞といふ西朝に仕へる

武名有といふや應永六甲天門家に随志泉州少

戦死魏公晩年遠州奥山にも志し一任れ一無文

禪師 南方皇子の心元 秋葉山城至天野家に親しき

由りも有りし故なり

立のほ五姻小知多山ゆの任らん元月をり

とよき 彼山寺にての縁に

案明魏公正二位權大納言右近衛大將藤原長親卿法名也

イニキ奇仙ヲ新兼集撰定ノコトヲモ委附ノ命ヲモウケラシテ摘題和哥集等ノ撰者ナリ又耕雲口傳一冊アリ哥ニハヲ記セリ又安成辰ト與書アリ畧系

師信 從信大臣 師賢 尹大納言 家賢 中納言 長親 右大將南禪寺祥栴院耕雲明親

藤原南家祖一位武智曆墓大和國宇智郡宇野村

永山寺 洛東泉涌寺 後山の巔小有古松一株有後

阿施墓 トヤトヤ 景勝の地 トヤトヤ 按彼寺ハ壺坂西南四里ハカリ吉野川北端ニ塚アリ牛馬ヲ通サスニ曳テスルハ必伏テアゴテ云ニ武智曆像ヲエカキタルアリ東帶袴ハ藤ノ像上ニ紫藤花ヲ描キハルトナシ

河内壺井八幡東西三四町はるかに源頼信頼義義家二代

の墓有り元録年中 台命により 之所權現正一位

地峯号神位勅授す 同時通法寺建立なり

貳百石の地或辰寺真言宗之塚ハ此寺地後山之神至

領貳拾石と云 壺井ハ八幡の山下にあり 井筒石中

佛像或多く彫 備々古代のものといへり

豊後祖母山嶽明神の子大神太太惟基其子孫依佑

氏勢州阿懐津小任勢 彼家鋒劔多 中にも巴作と

いふ大い祖母嶽ハ古傳と号し大小秘す藤堂高次

寛永三年十月十日彼大刀試えしき 座板鋪おつるに

是よりきしと云いふ分るれゆく 伊弉諾祖母山嶽ハ女

多不ハ豊玉姫命と云や女神の女ハ通ひたまひしと云

伊豫河野、孝靈帝の王子伊予皇子の御末こといふ代、道
後不在城す、今城跡あり、河野尾菩提、不両音禪寺、小河
野氏の画像有、慶長の末河野某平して家断絶、伊豫皇子
より五十余代、古流といふ、西音禪寺、今山、元村、小有り、昨道后
にあつ、し、このいふ、山、越村、小移、といふ、地、寺、り、十三日、桜、と、
各、あ、り、い、つ、も、正、月、上、旬、に、花、咲、く、十五、日、以、上、一、重、の、花、に、
櫻、の、花、と、い、ふ、梅、の、花、に、伊、豫、河、野、の、孝、靈、帝、王、子、彦、授、
嶋、金、代、伊、豫、由、移、し、り、り、伊、豫、皇、子、と、い、ふ、其、子、小、千、脚、子、に、
を、月、ら、小、千、郡、小、住、し、小、千、と、い、ふ、地、と、い、ふ、小、子、脚、子、と、い、ふ、二十、六、
玉、證、文、字、代、裁、智、小、改、と、い、ふ、廿、二、代、河、野、伊、豫、將、又、通、清、
治、兼、子、中、任、伊、豫、由、幣、職、其、子、河、野、由、而、通、信、北、条、由、而、

時、改、塔、之、子、孫、繁、昌、す、し、案、に、續、日、本、記、稱、德、帝、神、護、
景、雲、元、年、條、下、伊、豫、由、裁、智、郡、大、領、正、七、位、下、裁、智、直、
飛、鳥、曆、姓、氏、錄、曰、裁、智、直、石、上、同、祖、鏡、速、日、命、之、後、之、と、い、ふ、
慶、長、嶋、金、代、伊、豫、由、小、封、し、り、り、裁、智、の、祖、と、い、ふ、事、國、史、
に、い、ふ、序、自、可、臣、彦、授、嶋、金、の、後、と、姓、氏、錄、小、有、り、
子、夏、曰、高、聞、山、書、曰、地、東、西、為、緯、南、北、為、經、山、為、積、德、
川、為、積、刑、高、者、為、生、下、者、為、死、丘、陵、為、牡、谿、谷、為、北、峰、
蛤、龜、珠、與、日、月、而、盛、虛、是、故、堅、土、之、人、剛、弱、土、之、人、柔、墟、
土、之、人、大、沙、土、之、人、細、息、土、之、人、美、地、土、之、人、醜、食、木、者、善、游、
而、耐、寒、食、土、者、無、心、而、不、息、食、木、者、多、刀、而、不、治、食、草、
者、善、走、而、愚、食、桑、者、有、緒、而、越、食、肉、者、曾、毅、而、捍、食、

氣者神明而壽食穀者智慧而巧不食者不死而神故
曰羽蟲三百有六十而鳳為之長毛蟲三百有六十而麟為之
長甲蟲三百有六十而龜為之長鱗蟲三百有六十而龍為
之長倮蟲三百有六十而人為之長此乾坤之美也殊形
異類之數王者動必以道靜必順理以奉天地之性而不害
其所生謂之仁聖焉子夏言終而出

下略 執轡篇

大坂西大將女合河内國より少北に有勢採入有先小塙
團在焉二之備国郡大守古究め紀州表へ發向攝州先子国郡
被仰舟由一古遠仕有團在腹立先急取公在右
せし合はる寄来りて同共の朝女大坂の泉州 塚
以をい其月塙團在太学先取子二三百騎にて寄来り夜明けに

大隅陣不安松の町で焼拂馬打乗蟻通の女とて物見
に羅ゆらば大坂の紀州の為案内者山口兵吉同兵吉兄弟二騎
馳来りて大隅今度大坂の味方不仕大成不受人の事今昔
寄来りて大隅縛首に逢可申と岳長高小の縁に大隅の縁に
口陶紀州あてえる年馬物具被着れば誰人と存地山口足
にていひ多し我も乗馬の家康公の裾下荒馬を馬人代踏向
心寄りて命失ひしを地是乗寄りて與人多しと書来りて
引ていひ其後大隅家来国本然に御呼敵ハ付とて松原
来りて一人の若舟来り向ふも合戦の用意可致と
安松へ打掃い浅野在依根井より乗来り龜田に向い此
事通ふ今不炸摩利と天と存中と申多し大隅守乗向辱辱
折亦此の義ハ兵に我端の多し事此に石被掛也又跡代東陣

の月了とて見苦く存心痛り昇以山立山はとるは在依
在る幸陣可守跡以頼とる其次に上田宗吉来り合戦の以
可有とる後亀田中八此口より合戦の櫻井にて
可有とる幸陣の職立石より急心痛り山立山を以て宗吉
以も痛り宗吉来り着と等出幸陣の職立つ大隅後とる
宗吉以月より右兩人痛り此中一の月以立山は二六
一番合戦は此口より三葉山不可遠と在る大隅の南此町より
左の池堤に鐵炮五十挺以移り大隅の馬より下り敵陣古
酒とらに程を安松の町に百余騎我先少と山来矢ころ
由くと待外鐵炮のもたに詞以はる一度に打生死は不知
二三十騎馬より打落残敵はとり引大隅鐵炮以下知るは藥

以は之と一町余り引るて右橋にて折返又ま敵以打
退け二町あり引取右の方他の堤に鐵炮以移せ東部以打
す急又二町余りて引山はる敵は此處多官の前にて
打とりて櫻井町へ引取馬以西よりらに立止る息以併
以處に家来の若歌の味方やん東川京より来りしとに不
満之は六坂武者之歩行立の者弓以打馬にむつと来大隅馬
以河合へ乗れり一合以之被乗る大坂にて誰人少と加山
中八個馬身先子此大將亀田大隅身之尋席に鎧以可は詞以
存心大坂先子此大將國部大學とる者之と名備来に馬以歩
以也槍以に成如何思應之馬以引之北以さして退被中
以之介被退は一町より退急は櫻井以を元

存左隅立扇の交はて討死と擲云して馬より下り石橋小腰
以て十文字以打ちけ鐵炮の者共いつらに有るこまの事は
武藤吉之丞の故右共大隅赤武者の来り易思言は
のりけり多し故赤武者の右五人合以限り槍脇に仕と玉
以て之を誠たひさきと神妙と感して息以休む上田
宗古一騎乗来り四五間跡にて馬より右の方に打發先程鐵
炮の音を聞えり是是是引小引列石の承及びて感して
彼も大隅赤武者先程の安松の陣に居り昇り騎上今
是正心鐵炮の用も及り只今昔と我討死はても也
人塚以て可事存一博の間可有るも赤武者比羽森

被越城にて腹以心切可有と物緒仕羅兵衛方武者二騎
乗来り一騎赤武者にて二三間も先の一騎は黒武者小
て西人なると十間斗前にて馬より赤武者大隅小のり
黒武者上田にのり大隅の二間し出赤武者以て
赤武者槍にて大隅の先の上以二ツニツとて打赤以十文字
胸板以突撃する多くと廻り膝以折り又左脇つり以
つらむきに外は以鹿田家赤武者菅野兵衛のり
以取心死す外は以板打小切り以菅野加在場
彼者上赤乗鎧以首筋つり兵衛のり首以取せ
り上田の槍以打ち敵に組玉既不可被討取
宗古家赤武者落合被敵と打ち上田の陣以有

中川守本陣へ引退し其後大隅ハ五六間斗以進出の事
十文字以是して始り一歌取右侍一人騎來り大隅
と槍組と一張合す本陣家来菅野加左衛門一歌の脇に
以安倒し同家来深田作斎首取より此歌拾物も決悔
吉存と有る其後歌一騎來大隅左の膝以取つてす本
十文字より槍取よりみよの又歌一人もつて千鳥槍取ハ十文字
の上以二ツ多きも槍取にけ右歌ハ槍取捨の事
後歌ハ大隅胸板以二槍つて本十文字以ハ歌の右の肩先
以け列身刀も以掛之ハ肩以を以り列右中其後四足
大隅を以歌取去侍之も一人も不來家来今長も存り武勝吉
之え大隅以斷り本陣今もて鐵炮以大事に存高名不徒

御免く高名下仕として鐵炮を大隅本指道安松の方へ来
兩人存り首取て来多

一家来菅野加左衛門ハ控井西細道少歌兩人ハ由谷歌取退
拂り山圍本然之他一番矢負中十六歳吉存馬少五節兩人
分り刀打負り少小性十七歳菅野兵存取り首一番首
故早本陣へをし中の本陣佐家来矢本新存東川京に
て高名致し馬に乘本陣以りて来多本陣兵存取り上集以け
某大隅旗下一番首の以歩行立誠の首の以運来菅野
馬上少先ハ本陣其一番首ハ仕すも断り少事ハおけ
と返事し本陣へ来一番張りも有て兵存取り来首
指上ハ二番張り其後和哥山へ隔り右に張り断り本陣兵存取り

取首一番首宗古被首二番八木取首三番小羅成

一大隅首首四何我本道筋出取中

一左衛佐首首四何我東川家出被中

一宗古首首一ツ樫井町にて被中

一安井喜月多子助尾馬ハ長瀧村出被中但此處被中首

ハ味方打と申有

一大隅一番槍のきし武者無比類傷之醉合戦過て是

以介備仕今不持仕ハ城赤見是の武者塙團集二番目

系宗古打被中ハ團在集の家来之三番目に集大隅首取中

漢備吉集四番目ハ系大隅と也合ハ金丸ハ傳次ハ石大坂

亭ハ合戦討死の次ハ金丸ハ傳次ハ松浦作集ハ紀州ハ系ハ初云紙

一書以て但馬守及ハ中上迄如共ハ

一樫井夜合戦終大隅志川ハハ仕在陣秀野王子ハ羅成

但馬守及ハ一所程坊方ハ山岸に上田ハ亀田ハ腰以ハ羅成

及ハ但馬守及ハ越出大隅ハ今不始働宗古骨打満是ハ思召

ハ世被ハ右兩人ハハ本陣ハ御供ハ致事ハハ我ハ不ハ伝達ハ

山ハ海ハハ一揆ハも放火何所ハもハ上ハ

一首其ハ合戦の次ハ書ハ泉州出ハ浦ハハ舟ハ二條脚城ハ

程進被ハ半但馬守及今日ハ山中ハ脚端陣可有ハ自出敵

身込ハ系安事可有ハ間組頭一人可殺置トハハ我ハ可殺

トハハ無ハ不ハ然澤兵陣羅出某ハ殘敵来ハハ是ハ討死可

仕ハ由但馬守及其ハ諸軍勢感ハ兵庫ハ付百騎ハ可ハ殘

用意仕度大坂方次ありて北城より引退す兵庫に殘置
勢人分る御紀州越前山口迄引返す其夜八但馬守山口へ
陣取被り大隅宗古より負し下り暇被下和歌山へ浦尾仕同日
夜山入大隅宗古同道仕山口迄可羅我吉中來年上仕度但馬守及
兩人分る有躰可申上由は城居可申して諸勢我先も集り是
以河内龜田可申上大隅合戦あり上上因と其槍は多一度に
て可有山座の手に前崩れおし居る分明無きと申すは宗古等
左の爲は無座の大隅八我宗五六間も先り山座の申すは是
扱一番大隅二番宗古少可有と被仰ふ人とも其夜山又和歌
山へ窪堀の城あり守被成但馬守及山間被成城龜田儀八當御代小
至て西度山用と申すは其方と不可存天下の者と可有と

被仰出の城に雅有御遊と奉存河内流し御前成立子
其次宗古御目見被致し今度之骨折身御高氣御免可被成
との御遊より其月將軍様一番り宗古御目見被致しは
茶湯より宗古と御尋高羅立被り大隅羅出は坊度の御代
被届は是る御振廻可被りは其御代兵衛様被仰身は
甲より申上可仕との御遊少く羅立其月上因八但馬守及と立退
大隅一人兵衛様被系以振廻被下保呂上而の御脇指致村領
今善在馬小を置り脇指之事

一將軍様大隅小御感仕可被り由但馬及御代意有之は但馬及
被申上は同く大隅宗古兩人小感仕拜領為致及は訴訟
被滞兩人とも石被下は後振り以東之は上因御勘免之上に

比威状ハ羅被_レハ_レ在_レ也_レ但馬威_ハ比_レ許_レ江_レ以_レ叶_レ石_レ被_レ成_レ在_レ井_上至_レ手_及

一家康孫_ハ為_レ御_傳美_濃兼_常御_刀大_隅拜_領仕_紀州_一羅_漏今_又太_師
以_レ遠_還以_レ刀_の半_にて_レ也

一_以合_戰為_レ奮_美但_馬威_ハ一_廉之_知行_給以_レ右_之孫_子後_之上_右遣

物_諸可有_レ存_不書_に印_置以_レ糸_人之_御尋_以我_ハ古_果以_跡小_て也_坊也

寛文五年正月吉日

龜田善傳高成叙

同 又太師高連叙

同 辰巳傳家定叙

龜田大隅守高繩

入道鐵齋賢徳判

藝州東條城至來地一万五千石領
後者故整居高野山學信方
花王院知行天野邑加賀中納言
利當節每
歲贈食録
一万石及金百枚雜髮号鉄齋貞徳寛永
十年八月十三日病死花王院二葬云々
此龜田起り八日度秀一松本有書之

按小大坂記ハ上田宗古塙團奮討捕_とあり一説ハ本
新_{信濃}傳討_もあり多子助在傳討_もあり非_らずべし

宗良親王香火之地ハ遠州伊那依井伊谷冷港寺也今竜潭寺
と_ハ線_記曰_井伊_谷弟_松山_龍潭_禪寺_住古_号地_藏堂_寺或_竜泰

寺後有八幡之祠一條院脚与某年正月元朝神主某拜禮
際脚手洗井_{寺前}現一赤子神主奇之乃懷彼赤子飯家浴之而

進白粥至七歳終_進井伊氏之家是所謂遠江守護井伊備中
大夫藤原共保也_{今正旦寺僧以白粥}其後寺院荒齋矣後土脚門院

延德年中前妙心賜紫默宗和尚_{信州松源寺文收}當國之産也再與

地藏寺曰基山号百松改竜潭禪寺其後奈良院天文年中井
伊信濃守直盛領井伊谷而重脩當寺為祖宗香火之地正親町

院天正十四年東照君賜證章十八年秀吉公賜朱章慶長
八年神君賜寺產九十六石七斗五升朱章以來幕下代之賜
朱章云、天野信景說後醍醐天皇皇子一品將軍宗良親
王於遠所并伊谷薨号冷湛寺殿是所載日記也奄潭寺
與冷湛寺倭音相近疑默宗以冷湛寺曰号改其文字者歟
寺僧今不知宗良之故而徒語并伊氏之事而已其奄潭寺之
曰称俗所訛傳而實冷湛寺歟 天正十四年九月 神君賜奄潭寺
朱章三位中將藤原家康云、
冬夏事記上下畧作佐、孫助 今從大阪記松榮紀事
東西大軍爭進逼城庖人大隅與左衛門密通款於東軍
及戰酣縱火庖厨暴風歟起大厦峻宇一時灰燼煙
燄蔽天 下略

冬夏事記曰大阪城既敗而 神祖潛發茶磨

山唯板倉内膳重昌一人騎從過城中焦土出京橋命曰
大戰之後必有大雨頗趣駕時天晴從者皆怪之至森口
天陰至平瀉大雨如注夜二更到二條城内膳敲門父

伊賀守大驚開門云、 下略

松榮紀事難波戰記上略
五月九日從軍諸將至二條及伏見城賀于戈既戢四海寧
謐令西國中國之兵士屯大阪城墟限一百日以備灑掃焦
土

甲斐武田家山縣三郎昌景女誠信州栗田鶴壽九比嫁以甲子成
生以栗田承壽九号天正年中鶴壽九高天神城少承壽子栗
田源篤後酒井家小從仕子孫今出村庄内、有鶴壽九信州堀内

城是代善光寺又配寸心
武田勝頼賜栗田書

定

親父鶴壽三年高天神籠城被賜粉

骨之上戰死誠忠信不淺次子山田右拍来

舊領齒知行^并同心被友仰亦有長邊

弟被去計向屋延可被抽忠節儀可為

肝要者之仍此件

天正九年辛巳

五月廿三日

勝頼判

栗田永壽殿

定

一善光寺小山堂坊中^每町屋鋪亦之儀可為

栗田斗之上不可有他縛之事

但仕置等有長邊之儀不可下知之事

一町屋鋪諸役之儀向後可令免許事

一六月之高棚上所^打之者諸法度以下可

為栗田斗事

一佛衣洋趨之增上下共不可致番請但由之振

儀為身束崇敬之詞若輩之人不可

勤之事

一從信州存善光寺集未々僧俗或守罪
科人或出罰錢亦々後義一切停止

但有倭人隱置盜賊又八月國法者可

行歲科々々

右条々以法性院殿御直判被定々上右

自今以後亦不可有々違々仍如件

天正九年辛巳

七月四日

勝頼判

栗田永壽殿

其外善光寺元

右二通共々登紙庄門栗田家藏

子首匿父母等勿坐詔 漢宣帝

父子之親夫婦之道天性也雖有患禍猶蒙死而存之誠愛

結於心仁厚之至也豈能違之哉自今子首匿父母妻匿

夫孫匿大父母皆勿坐其父母匿子夫匿妻大父母匿孫

罪殊死以上請廷尉臣聞 後漢書吳祐順帝時遷膠東候相祐政惟仁簡以身

父得而恕曰有君如此何忍欺之促婦伏罪性慙悞詣閔持衣自首祐屏左右問其故性性述父言

科斗書以梵梵小摩那書と云々等轉書以伽那跋

多書と云々 皇朝の真名假名と云々

豊大園ありやに入勢多ふ代養安院法印伺假勢に片

喜多宰相秀家渡海の脚帳申さる折多りり法印に

向て異心の産物何の所に贈りしと有りと云々

大圖書籍之の多しと仰ありしと云わくて凱旋の

時官庫の書紙船につきて贈しきしと云ふ

同齊法印につきて其書紙に記したるものなり 解月乃善本小

菅廟ハ延喜三年癸亥二月廿五日薨氏細井知填の

通曆代以て推小延喜三年二月ハ丁卯朔ハ壬申

廿五丙申ヤ云々直行書養頼丙寅日ニ死シ奉末日葬ル云々論衡ニ學書之人丙日

後白河帝ニ熊野猪小藤代の宿小つり勢あり

置多に國司松烟とつきて御前に置たり花山院左府中山

大政臣入道との付右大将にて御前に候おき此多にこの書紙の

何もの物を試しと勅定ありしと云ふ

すしと終置るもの松降月此定ありしと云ふ

左府えとありて

頻に感美純気色ありり藤代ハ松多シ 皇朝墨ノ初ハ此地ノ

冷泉為重卿七夕墨の題あり松煙ヲ用ケ

す多墨地と此藤代の秋よりて多えり七日の梶の玉章

逢しと此松にけり多藤代の墨の名志多記梶の玉章

天福元年俊成卿卒後 三十二年 歳在癸巳

十二月廿七日中院尼上来訪定家卿七十二奉去年貞永元年壬辰定家卿薨駿 此尼上俊成卿女孫大納言通具郷室具定卿母公也

嘉禎元年乙未 定家卿七十四歳

四月十三日金吾参議右衛門督 為定卿相具少将左少将為氏 朝臣来暫可在中院云々

廿三日密に乗輿行中院見中嶋藤花藥

廿月一日自中院頻招請雖怖壁耳依難遁乘入此土門

出途入道列幸三人子弟皆好士云々列坐東庇予金吾

在京權大夫彼入道在南面中務未考加東面始連歌過半之間窮屈
入障子西台臥聞之下略

五日午時歸入蓬門

廿七日予本自不知書文字事嵯峨中院障子色紙取

予可書由彼入道懇切雖極見苦事赦染筆送之古來

入歌各一首自天智天皇以來及家隆卿雅經卿以上明月記

嵯峨清涼寺地所中院存と唐地ハ方も何もに

定家つの別荘も厄上の宅入道の長郎も何も成一

家持郷の人の船ハ久くてハ好ろうといふハハ觸ハ

我ハ托子るも李仰時の畫も蘭亭觴詠圖ハ周府益王

荷葉に作らるも明宗景灑の鏡も文に觸各有舟

如荷葉も有り晋時の禊事ハ終られりて左右に

外に居ると叙文にも何事ハ舟舩のるにも何も事も無し

勿論も多くに世に傳へり李唐地徳宗開成二子丙

辰三月二日白糸等十五人舟中に合安せて記文集に

有り之も是ハ家持郷卒後五十餘年地事也大伴地主詩萬葉十
七三見

蘭亭會集四十二文のうち二篇つれば多人土人一篇の

人十五人詩多く男人十三人や女人二名の記文多し

多くと記沈醉しても強て化られるも何も事も無し

無病沈吟ハ勢多く十六詩人也作ルラアシト云ニアラス患アウマラサレハ作ズ
作ラスハ慚愧トモセス風致ラニヨトナリ

龜田高繩泉剛櫻井表合戰覺書曰元和元年閏十月廿日に

大坂ハ為ル使吉村兵衛守成紀所淺野右近同左馬佐督

大隅へ被りし其の趣ハ但馬守及シ藤秀頼云々の事ハ彼成守御
如在ハ不被思存り及シ去冬大坂表へ被働事案に去邊思存
大隅の事ハ不被忘るハ味方頼思存ハ但馬守及シ右
両三人頼思存ハ不同ハ但馬守及シ千枚合銅云々の家老共
一ツ被下三人ハ馬上ニテ騎リ御預ケ直ニ可被出止の此上之
右三人大隅方ハ打寄於合仕充ニ被仰下此等共但馬守及シ藤蘭繁
の御取立之紀別ニ御成爲去但馬守及シ不及中ハして大坂の
御込事ハ被仰り上意畏奉存ハ係但馬守及シ關東の芳良
被蒙リ被中ハ系被仰例共不被得其意ハ洞先御使ハ込ニヤ方
吉村中後ハ兵匠等ハ隔リ中ハ此處ハ大野修理等トシテ御書
以三人ハ被下ハ修理書状曰免角但馬守及シ味方頼思存ハ

御本意被爲違ハテ紀伊云の上ハ大和可被進ハ淺野左馬侍ハ
攝津由同在江ハ和泉國龜田ハ河内ハ一ツ所可被下也又西之
右邊方ハ打寄致終合一同ト人此何被被仰り也モ大坂御不難
成爲御使及西度此處ハ但馬守及シ中上此邊事可トトテ
右之但馬守及シ右の御使の托子今度の趣トモ但馬守及シ御
存リ可被出ハ御請仕也ト被仰り是非御味方難仕邊事
中上吉村御預ケ之被不ハ枚倉伊賀守等カハ但馬守及シ此際
事ハ中上大各元何成銅由御三表表ハ中陣の事ハ但馬守及シ
系ハ御妙存有之ハ門意被御成也ハ此等打立可トトテ陣
觸有之都合事トテ午の事到ハ泉州佐野ハ市場ハ先陣
左陣ハ同ハ信達不着々ハ市場ハ此際ハ大坂ハ大野至馬

助同通大將為大將方人紀州表一向の由申来依之志の者
在蒙に奇合戦の許定寸成野藤頼中川の継何方にて争
合戦下野との亀田中川の在馬佐被中川の事合戦の地
勝り申はくは先ん北前備東の野を度くして山邊く
西の海を濱辺をく馬地を引自由成不為是の四百に奇
来多た敵五千抱お勢以合戦を勝り難得山向一里引左
蟻通明神の松原に當私に安松先の武備敵出松へ
引舟八丁繩の鐵炮は繩列に仕榎井町合戦不仕の地
北前存蟻園の松原に有て味方の事かえは又八丁繩
両方備田の一騎おの事かえ大勢難東在之何万と申も
一騎合地勝身と申中川の合戦ハ性小御勝る事

是の重なる左馬佐中川の合戦御勝る事今日敵と不
防して御逃仕義先凶悪の州大隅ハ引及も在馬佐
に於てハ引取中川と申大隅言事申して曰加
中ハ大隅の今度の合戦人に勝る事討死可仕と但馬
相言紙上置り北前備列取川口榎井にて打死不無
左ハ一番鎧下格景性被り左馬佐川口敗軍眼を
して申ては左馬佐渡河立力相に申ては左馬
互上り既山喧喧及討浅野左近両方拵中入被り
有るは是に於て隆義時明少中川但馬及之被尋不
と申奇兩人志川一田越前武幸陣へ志一兩人の
戦も志心一有て却前崖端各連座の上上り但馬及被

出浅野御家にて九度御用之羅夏今度も五千と懸先也此有
 成被仰事の大隅儀に如何何れも合戦の極子亀田攻身仕足
 と申後々付亀田辱と云流流一屋鋪紙屋五五小
 安松引取の古伴人々にて浅野右近浅野日向安井
 喜内多子助奮伊藤金左馬山岩井傳兵衛後藤清
 何引取事の大隅安松小陣右の事にて長瀬村小陣夜
 明日は待前場小古殘者共浅野右近依同大炊助仙石
 因情上は少なき事と云と明方に安松も云立の此は安松小
 大隅陣不瓦控井近引退中も控井在家不多夜下
 過事川原に野陣拍前夜半の事なり雨夕了出夜
 明日も雨止中も

此次前ニシテ可係

其後主井大炊頭定テ大隅事手負候テ步行難儀ナルベシト下馬ヲ乗輿御免ナサル也

劉晏造舡合費五百緡者給予緡使吏胥工匠皆有贏
 餘由是舟舡堅好漕運無虧足以佐唐之中興是皆
 得廉術者也東坡曰天下之事成於大度之士而敗於
 寒陋之小人

諸葛孔明征蠻馬謖曰攻心為上攻城為下心戰為上
 兵戰為下其論高矣街亭之敗用秦穆宥孟明故事
 可也蜀執日傾蜀才日少而乃流涕斬謖過矣夫法立
 誅必而不權以古人八議之仁此申韓之所為也前輩謂

子房之學出於黃老孔明之學出於申韓信矣

李斯臨終謂其弟德曰吾子孫若有志氣不偷文游非類者必先掘殺之而後以聞其言嚴厲如是

酉陽雜俎勳孫李敬業年十許歲勇悍異甚勳
 患之伺其入林獵獸縱火焚林敬業見火至剗

所乘馬入其腹中火過浴血而出迄不能害

胡澹菴書遺從子維寧曰古之君子學欲其日益善欲其日加德欲其日起身欲其日省體欲其日彊行欲其見心欲其日休道欲其日章以為未也又曰日知其所亡日見其所不見一日不使其窮俛焉其愛日如是足矣猶以為未也必時習焉無一時不習也必時敏焉無一時不敏也必時術焉無一時不術也必時中為無一時不中也其競時如是可以已矣猶以為未也則曰夜者日之餘也吾必繼晷焉燈必親薪必然膏必焚燭必秉蠟必濡螢必照月必帶雪必映光必隙明必借暗則記嗚呼如此極矣然而君子人曰終夜不寢必如孔子鷄鳴而起必如大舜坐以

待且必如周公然則何時而已耶范甯曰君子之為學也沒身而已矣

漢食貨志云冬民既入婦人相從夜績女工一月得四十五日注謂每日又得半夜為罕音也然則農之宵雨索綯儒之短繁夜誦豈可少哉

古今稱大人其儀不一左氏傳子服昭子曰夫必多有是說而後及其大人孟子曰有大人之事有小人之事此以位言也所謂王公大人是也孟子曰養其大者為大人昌黎王適墓誌曰翁大人不疑此以德望言也所謂大人君子是也若易之利見大人則兼德位而言之今人自稱其父曰大人然疏受對疏廣曰從大人議則叔父亦可稱大人范滂將就誅與母訣曰大人割不忍之愛則母亦可稱大人

楚公子微服過宋門者難之其僕操箠而罵曰隸也不刀

門者出之晉王一飲之敗沙門日雲永匿其幻子華使提衣囊
自隨津邏疑之永訶曰奴子何不速行挫之數十由是得
免宇文泰 與使景戰河上馬逸墜地李穆見之以策扶
泰背曰 籠東軍士汝曹主何在而尚留此追者不疑其
貴人與馬與俱還三事相類 每履義挫以安宅
陸象山云男子生而以桑弧蓬矢射天地四方示有四方
之志此其父母教之望之第一義也顏子之家一簞食一瓢
飲在人不堪憂之地而其子乃從其師周遊天下履宋衛
陳蔡之厄而不以為悔此豈俚俗之人拘曲之士所能知其義哉
蓋誠使此心無所放失無所陷溺全天之所予而無傷焉則千
萬里之遠無異於親膝不然雖日用三牲之養猶為不孝也

數窮於九九者究也至十則又為一矣此蔡西山之說

占雨詩

范石湖

朝霞不出門暮霞行千里今晨日未出曉氣散如綺
心疑雨再作眼轉雲四起我豈知天道美儂諺曰雨古來
占滂沱說者類恢詭飛雲走群羊停雲浴三豨月當天
畢宿風自少女起爛石燒成香汗礎潤如洗逐婦鳩能拙
穴居狸有智蜂蟬強知時蜥蜴與聞計蛭鳴東山鶴堂審
南柯蟻或加陰石鞭或議陽門閉或云逢庚變或自換甲
始刑鵠與象龍聚訟非一理不如老農諉影響捷於思哦詩
敢誇博聊用醒午睡此詩援引占雨事諺云日出早雨林
腦日出日安曬殺鴈又云月如懸弓少雨多風月如仰尾不末

自下二說尚遺何也余欲增補二句云日占出海時月驗仰尾體

崔林玉露歐陽永叔文和平深厚得文章正氣蓋讀他人好文章如喫

飯八珍雖美而易厭至於飯一日不可無一生喫不厭蓋八珍乃

奇味飯乃正味也

告命考告命自九品而上角軸二等以大小別之此其卑也涂牙以

為經凡五等陞朝歷數而上也而穗草為尊錦標其端

凡四等而細毬之錦配穗草告身皆制綾為之玳瑁軸

素繪二等而繪為尊告身五綵而又有紫絲法錦

外其小異者錦之紅絲耳犀軸亦二等藻繪雖間而大小有

別三品通用也絲囊如玳瑁而慄錦又不同告身亦如之

而加以金縷此人臣一品之極也宮掖之嚴帝姬之親大略七

等鑊犀為軸瑠玉以為籠告身五綵絲囊慄首紙紅而繪

如瑠玉者最高以近君也犀軸絲囊為最高而繪皆雲鳳

者次之玳瑁者又次之繪事如玳瑁而告紙損其三者又次之自此而

下三等皆紫絲法錦雖有差次始寢早矣宰相親王贈封視

紫絲高者執政贈封視次者其上四等明有尊不敢迹也

絲囊之制以小鈴十繫之按式名曰訥鎔黃金塗金百金

三等外廷之繫惟白金耳侍從庶僚所封視其官蕃官

祠宇所封從其秩合而陣之二十有八等品位俞高則物

采俞華此游默齋所記采朝之制也甚詳明

伊尹墓在空桑北一里相傳墓傍生棘皆直如矢范石

湖使北過之有詩云三尺黃壚直棘邊此心終古享皇天

汲書猥述流傳妄割擊嗟無咎單篇蓋汲冢書妄載
伊尹謀篡為太甲所殺也事見杜元凱左氏傳後叙

陸象山家于撫州金谿累世義居一人最長者為家長
一家之事聽命焉逐年選差子弟分任家事或主田疇或
主租稅或王出納或主厨爨或主賓客公堂之田僅足給
一歲之食家人計口打飯自辦蔬肉不合食私房婢僕
各自供給許以米附炊每清曉附炊之米交至掌厨爨
者置盥交收飯孰按曆給散賓至則掌賓者先見之然後白
家長出見款以五酌但隨堂飯食夜則卮酒盃羹唯久
留不厭每晨與家長率眾子弟致恭于祖禰祠堂聚揖
于廳婦女道萬福于堂暮安置亦如之子弟有過家長

會眾子弟責而訓之不改則撻之終不改度不可容則告

于官屏之遠方晨揖擊鼓三疊子弟一人唱云聽

聽、聽、聽、帶我以生天理定若還懶惰必飢寒莫到飢

寒方怨命虛寒自有神明聽又唱云聽

聽衣食生身天付定酒食貪多折壽人經營大甚違

天命定、定、定、定又唱云聽

剛身命更將勤儉答天心莫把妄思損真性定

定、定、定早猛省食後會茶擊磬三聲子弟一人唱

云凡聞聲須有省照自心察前境若方馳騫速回光悟

得昨非由一項昔人五觀一時領乃梭山之詞也

近年朝廷始
旌表其門閭

漢昭帝時夏陽男子成方遂居湖有故太子舍人

謂之曰子貌甚似衛太子亦遂利其言乃乘黃犢車詣北闕自稱衛太子公卿以下莫敢發言雋不疑後至叱吏收縛竟得其姦來靖康之亂柔福帝姬階北狩宋建炎四年有女子詣闕稱為柔福自虜中潛歸詔遣老宮人視之其貌良是問以宮禁舊事略能言彷彿但以足長大疑之女子頻卑蹙曰金人驅迫如牛羊跣足行萬里寧復故態哉上側然不疑其詐即詔入宮授福國長公主下降高世宗汪龍溪行制詞云彭城方急魯元嘗困於面馳江左既與益壽宜克於禁齋資粧一萬八千緡紹興十二年顯仁太后回鑾言柔福死于虜中久矣始知其詐付詔獄乃一女巫也嘗遇一宮婢謂之曰子貌甚類柔福因告以宮禁事教之為詐遂伏誅前後

請給錫賚計四十七萬九千緡古今事未嘗無對成方遂遇雋不疑故其乍不行此女巫若非顯仁之歸富貴終身矣按國朝亭保中天一坊カ一マサ此下相似ハレヨリ巧出セシヤ

始皇為楚所敗尚能謝王前羽袁紹為魏所敗乃至殺田豐欲不亡得乎

宋高祖留葛燈籠麻蠅拂於陰室唐太宗留拓木梳黑角篋於寢言以此示後也猶奢

宋韓魏公曰養兵雖非古然亦自有利處議者但謂不如漢唐調兵於民獨不見杜甫石壕吏一篇調兵於民其弊為如此後世既收拾強悍無賴者養之以為兵良民雖稅歛良厚而終身保骨肉相聚之業父子兄弟天婦

免生離死別之苦此豈小事魏公此論可謂至當

宋嘉熙間江西峒丁反吉州萬安宰黃炳塢兵守

備一日五更探報冠且至炳亟遣巡尉領兵迎敵衆皆曰

枵腹奈何炳曰第速行且至矣炳乃率吏輩携竹羅木

桶沿市民之門口知縣買飯時人家晨炊方熟皆有執飯

熟水厚酬其直負之以行於是士率皆飽餐一戰破寇

由此論功擢守臨川兼庚節

唐太宗末年讖家明言女主昌又明言為武氏又明言其

人已在宮中乃以疑似殺李君羨過矣則天當時特一

宮嬪誠無可疑之迹然史載太宗有駿馬曰師子駉極

猛悍太宗親控馭之不能馴則天時侍側曰惟妾能制之

太宗問其術對曰妾有三物始則捶以鐵鞭不服擊以鐵槌
又不服則以匕首斷其喉爾由此觀之其英烈猛厲之氣
亦自發露特太宗不之覺耳則天後來駕馭群臣專用
此術

文德實錄 嘉祥三年己亥

詳正良 仁明天皇崩同五月辛巳嵯峨大皇太后

崩先是民間訛言云今茲三日不可造饌以無母子也識者聞而

惡之其無母子遂如訛言此間田野有草俗名母子草二月

始生莖葉白脫每屆三月三日婦女採之莖搗以為饌傳

為歲事今年此草非不繁生民之訛言天假其口也

文德實錄嘉祥三年條 伊豫國神野郡小灼熟聖人

聖人と稱乃親鸞にしし乃為に可可矣

元和元年七月

武家法令十三條

神祖與大將軍議定武家法令三條實真永建武之式日七日會列辰於伏見城使本多正純論告之

其一文武弓馬之道可專講習日曰左文右武古之法也
不可不兼備矣弓馬武家要樞也號兵為凶器不得已而
用之治不忘亂何不勵修鍊乎其二禁群飲佚遊日曰令條
所載嚴制殊重耽好色業傳奕是亡國之基也其三不可匿
犯法度輩於國中目曰法者禮節之本也以法壓理不以理
壓法背法之輩其罪不輕其四諸國大名小名及諸給人之士
率有告謀逆及殺人者可速逐之目曰挾野心者為覆家
之利器絕人民之劔鈍豈可寬容乎其五自今以後國人之外
不可雜置他國之人目曰凡諸國其風各異或以已國之密事
告他國或以他國之密事告已國皆佞媚之萌芽也其六諸國修

繕城郭必須上言况新為宮構嚴禁之目曰城過百雉國之
害也峻墨浚隍亂之本也其七有鄰國企新義結徒黨者
可速上言目曰人皆有黨而達者少故或不順君父或不容
於鄉里可不守舊制而妄企新義乎其八不可私締婚姻
目曰婚者陰陽和同之道不可輕易睽曰匪寇婚媾志將通寇
則失時挑天口男女以正婚姻以時國無慝民也以婚成黨益謀
之末也其九諸大名參勤之法目曰續日本紀制曰不預公事不
得集已族京裏二十騎以上不得集行然則不可引率多眾百萬
石以下二十萬以上不可過二十騎十萬石以下可應其封祿但供
公役可各隨其介其十衣裳之品不可混雜目曰君臣上下
可為各別白綾白小袖紫袷紫裏練無紋小袖無免許

輦不可濫著近世陪從諸卒服飾僭用綾羅錦繡甚非古制焉其十一雜人不可恣乘輿曰古乘應其人無免許而乘輿之家有之至近世倍從諸卒亦乘輿泛濫之甚也自今以後國主大名以下一門貴族須不及免許乘之其餘親昵近臣及醫陰兩道或六十以上之人或病人等須免許以後得乘陪臣從卒恣乘者罪其主人但公家門跡及諸出世者非制限其十二諸國士人專用儉約曰富有者益侈貧者耻不及俗之凋弊莫甚於斯宜嚴禁之其十三國主宜選用政務之器目曰凡治國之道在得人明察功過賞罰必當國有善人則其國彌殷國無善人則其國必亡此前哲之明戒也

駿府記家忠日記松榮記

長野清良 新頁 返書略

虎豹考

虎皮鋪席に似るし事ふ小し

禁中にて用は

皆丸皮に依り小座の既小今も門長 カトノラサ の鋪皮も丸皮

の俣且大中か將の胡麻も丸皮に依り カトノラサ 常の坐皮

に依り仕立右青水の頃より他出ても寸法常の通なり

座に但虎皮に、あり紫皮をとり用ひしは定式に依り

室町家の虎皮 鎌倉年中虎皮引取シタマヒ 公方様にも虎熊の割文

と定りしは虎皮も虎 將軍様にも事ふし 將軍様にも事ふし

三藩 田安一橋 虎鋪皮御用も無座の國家虎柄も用

元はさる筆小、有 清水 虎鋪皮御用も無座の國家虎柄も用

九五位以上聽用虎皮但豹皮者參議以上非參議三位聽之自餘不在聽限 延喜式

赤坂城上下二ヶ所平野將監入道のこもりし上々々金
剛山の西につもきて長く尾崎のおとくふて山高し十餘破
り二十六町有り山上の城址横十間長廿五六間より東の
埋樋の跡より四方皆峻岨之楠公の最初たもりきりし
下の赤坂々々平にして東の方に田あり三方平地にして岡
山々々今其山上に紀伊の邊路之太平記の彼赤坂城東一方赤
山岡の畔重々たして高くか難所の指ふき三方皆平地の
讀^{楠公}てり方四町小なる方平城々々上下の間十余町有り
千餘破城の廣五尺の楯少て四百余々々<sup>大槩方一所小芝城廿尺
すこ不足</sup>
築上は土より下卒の地取土より三尺堀て長二間の楯以五尺
其間各四尺小一卒の土居少て貫二筋通り又土乃
中に一筋とほり又土より上にして一筋以上貫以通り上下

四筋より二間の楯以土境中へ埋むる七尺卒土三尺芝土四尺
分り物きりたすも左右々々崩當りて上五尺の
堀やきり兼或るりて其上に矢切あり楯と楯間に守分
守分の矢より長三尺守の人形以岸小立内より射
射せて射よき高き^{高き}切多し前眼の上下に守
分守分貫り堀の柱小々回り一尺八寸大々々二尺余々々
又守守の本城堀の骨に捨て其間には石以入て土にて
乾い^{乾い}て内外より又土以つて四尺に矢より一内小
三尺の走楯取に捨てり^射敵岸に上り大石以投入為
り石の形丸き丸き安けり石の十尺一人持或二人持
り一人持て二持程の石以堀の内丸所にて積置又

右木丸四つ三尺四寸五分長四五六尺に筒切て塚の外焼根の末に
横にさす箭眼八内八文字外八文字所よりして同くさす又高橋
以難多うさうして塚内二間半或退中て木或植さうと坂中
にさす敵に堀或上り又の討て入るにさす付家と壁との向に
樹林生茂りさす味方ハ少勢にたさす敵ハ容易に討てさす
何れか一切の木葉松柏の類の外ハ若葉の耐さす蒸乾
置さす大食食物にさすかのことと又枝ハ薪とさす大さすハ
用は焼為さす又長五間横四間地土藏ハ矢或籠鉄三万斤或
用意ハ鍛造ハ人さす矢根或さすハ炭三千余駄塩岳
余石其外油干魚海草干菜等の類其數もさす九月十七日攝州
四方に傳へ二間の元藏ハ稲穂或つえさすさすハ去九月十七日攝州
中嶋仁發向きて氏屋或追捕ハ食物の類ハ云に及つた守城の用

に立寄物残るに稲穂も刈取穂ハ取て籠たり大倉二千余斛
米穀雜物三万余斛とさす重代の宝器等のさす法却さ
さす或買廻ハ其外ハ一年兩國 何果のとりものさす又水ハ其嶺
に有るさす或計るに滴り或は口出りり汲て五年又の
器に満て是或さす又井地中に竹或立て水の介量或
さす其介にさす當時さす或汲かくの如さす一日一夜次
の口出或等限としてさす或計るに十斛ハ少く是限
をさす記ハ五所秘水云さすしてさす或以て人数ハ配當ハさす
一人の用水一日ハ一斛分これにてさす不足ハさす十人
或一組として一斗或下行す等に洗足湯て不足ハさす
但洗足湯水ハ米の洗け或用水ハさす或又十斛さす

糶水形船小舟へて火矢以海へき為分り是の如くは多時
十斛の千人は用水く物も不足分りも所見人と記の如く
水取ありしとありしにける是れあはれとて兵士小日別黒
一将介の者に二斛と記してすてにありし時兵士三合
働く日三合は増し將介の者に三合に同し餘り不用
の介といかくの如く當行て千人は介に五千人の用意之物
も城に敵死用む日白晝にも夜中にも兵士は小食絶
る付はち小疲るも時頼の思をいしも城は多う故
也初菟城の人救千人とも思をいしとも又思案する金鉄の兵
八百十余人とありて互にあり正成の北基諸軍兵の妻室の
賀名生地真視の寺に七帝正氏和田正遠恩地左近志貴の

渡邊五郎等一千余騎にて守護城中援奇兵云々

麓ヨリ山上マテニ町程アリ東北南ニ寺ハ大山ニ近シトイニ杜ニシテ山ニツカス四カトニ嶮岬ナリ山上廣ラス山ノ東西へ長ノ南北
狭シ金剛山ノ方ヨリ上ハ東端ニ先ニ段アリ中ニ下所アリ西チスニ廣所本丸ナリ城上ニ段ニ段アリ西ノ最高所
大手ノ櫓ノアトナリニ大佛奥州攻ノ跡ニ但奥州陣所草村ノ方ニアリシトイリ又岸都宮ノ櫓ヲ堀崩ル跡ナリトテ今ニ見
エリ東南北山ノ間狭シ西チニ早村アリ谷底ノ平地ニシテ境内甚セマシ民家ニ三十軒ガリアリテ村高百四十斛ノ所ナリ然レハ
西チヨリ外ニ陣スヘキ所ナシ閑東ノ大軍ハ四チノ山ニ陣シタルニ各越カ水ノ手ヲ守リテト云所ハ東ノ谷川金剛山ヨリオツル水ナリ
秘水跡城塞ノ方上ヨリニ間分リ下ノ山ノ半腹ニアリ金剛山トテ叙破間ニ楠氏ノ石塔アリ甚大ナリ石ノ瑞垣ナリ并ニ燈臺ニ基
ト三石若洲建幸リニ首塚ナリ又觀心寺ニ今アル所小石塔是首塚ナリイアレカ是ナルシラス

おびもとの向す糸丸向しひん盛く上下の向しハ

全三代天曆也 枕草勢中居の山と集に
村上の御時宣耀殿の女御と聞えり多に父おのり聞え
うせむいよ多ハ一ハ御も成り元々一つふんハ琴の所ニ
いして今も心より人とは勢をて古今の言二十巻成り
うまう勢多し人成御のくも人ハせり勢多し人ハ聞え

下略須参考

系地永樂錢東國一貫文九石西國八石但國の遠近に
石高遠く所領十貫ハ百石小高家として
米俵公領と西三家ハ蜘蛛二筋九織猪家ハ蜘蛛一筋
八織 陽き回一清三藩ハ人々

今の里救ハ 佐吉 正親町天皇天正中地の三十六會に配して

三十六丁と云令の比り六丁一里と云るも

八月中旬淡海竹生嶋の北洲へ鯨數百尾つり受取

人々のて其不へ棄りしハ傾露ハ云ハ 鯨魚能載鹿

享保中三州吉良富吉村大雨の節隄潰き大蟹ハつり受

大サ二つ大曲方有り 高麗太祖年管城東虫蚯蚓長七丈 三州へ林月正森の書に云

享保中丹波柏原遠坂村山崩蚯蚓出り長一丈五尺許云

是處南蠻貢里名

猫の後逸々者月の土旬に嵐吹り散り下旬に蟻尾

伏見天皇御宇

石鳥居の由来ハ 永仁二年甲午 僧恩性天王寺

の立務成管とて 鉦本宏村の朽顔其夢成願

石城ハ二丈五尺に造管勢ハ成作ハ云

元弘元年辛未七月七日大地震富士山崩數百丈

延文五年丙午九月高麗人來朝着岸出雲遂赴洛義詮

令不納之於洛中使居天龍寺其牒狀曰近年有賊船數

多出自貴國地面侵奪我海邊燒毀官廨搔擾百姓

移文於貴國昭驗為行下加禁治毋使如前出境作耗
義詮謂是九州海賊之所為也所不及加刑罰也故不贈

返簡賜鞍馬十四匹鎧二領白太刀三振綾十段綵絹百

段扇子三百本於使者歸國

明德三年申冬吐朝鮮遣使請修隣好
將軍義滿許之 僧中津書對疏

應永五年戊寅春三月二條閑白師嗣子道忠受義滿之

諱字改名滿基

二條家世將軍家一字以賜之推與之

同八月朝鮮使者扑敦之到于周防大内義弘接待之義滿賜書

於義弘以諭朝鮮

時扑敦之以貨物送義弘受之云、義弘後及謀所亡

同八年辛巳 義滿贈書於明帝 寄黃金千兩及若干器物

同九年壬申

建父明帝寄書於義滿入道道義

書中日日本國王源道義
道義大悅焉云

同十年癸未冬十月明成祖贈書於道義告即位同十一年甲申

明使復來同十三年丙戌冬明成祖贈書寄種、寶器

以誅掠彼海
道之盜長故
謝之也

同十五年戊子夏五月源義滿薨冬十二月明使來朝

乃贈書於義持示慰之且
作祭文而謚曰恭獻王

是歲南蠻貢黑象鸚鵡

應神神功緣記考

永享五年 夏四月從一位源義教親書應神神功緣記

奉納河内州八幡宮

應神紀三卷神功紀二卷云

壺井八幡宮ニヤ今猶存ヤキカホキコトナリ

同四年壬子春三月源義教學射於小笠原政康

あまのり世の
將軍家小笠原家ゆて

朝鮮吊使考

嘉吉三年癸亥夏五月朝鮮使來朝將到兵庫時畠山

德本謂異國人訛事於貢職實為商買也且將軍歲尚幼穉

也諸大姓國役之費帝為無益也不可入京師鮮人謝曰為奉

吊普光院殿也不敢為高買來也於是使入京師六月入京

館之雙林寺傍景雲庵參室町館謁將軍義勝其路次作

乘凡馬上者五十人觀者如市

同七月義勝幼好乘馬其取如壯士也諸州爭貢駿馬時自

雲州所獻之龍馬馳驅勝諸馬義勝常乘之一日義勝騎之時此馬驚奔蹶雷不止遂墜是薨時十歲初一條兼良天下之善馬見集京師諫義勝曰君幼歲好騎乘列國應風貢良馬故良駮集京師前世未聞如此夫駮馬之出世者臣密誓之亂世兆非治國之祥君願禁此弄義勝遂不聽左右阿義勝之意不謂寵弄日長至于是矣治世三年號慶雲院父安三年辛未秋七月琉球人來朝同九月以琉球人所獻之鳥目一千貫奉進於禁裡

享德元年自丹後國出有躰無頭屍背有祿志字

後元園天皇

長錄二年戊寅春正月廿九日兩日現

閏正月二日滿月出

說詳于本朝通志後編十九日野勝光諫言

同二年己卯六月廿日兩日並見 寬正元年庚辰春正月朔日三日

並見

贈明主以物考

文明七年乙未秋九月

蓋父義政所為也遣使九九度

源義尚時十歲贈書及散金鞘柄大刀二把

硫黃一万斤馬腦大小二十塊貼金屏風三副

黑漆鞘柄大刀一百把

槍一百條

長刀一百柄鎧一領

硯一面

並

扇百把

於明主

大田道灌素精城築嘗築武州松山城懸一簡東門曰有加難於此城者以重賞謝之然恐不措其關所時城壁四面植松柏旅人仰觀曰松含不斷之風添颯嚮有入間之使四壁松不如不植之道灌驚使人追之旅人遂不見世流為神人毛利元就歲十二詣嚴島神祠歸路問從者曰汝曹祈何事士曰唯禱若君他日平治山陰山陽兩道而已元就聞之不喜曰而何禱之少耶祈君天下也時領七千貫地多治此其自幼有大志如此

洛中地子銭考

天文二十年辛亥春三月三好長慶下知洛中地子銭事

古本入平記に正成、宿願少く、新田義貞、足利直義、名和

長年等命して、いふ、一、の合戦、評以、義貞曰、軍攻以

し、義経多し、正成曰、義経、小、戦、得て、謀攻、小、以、敵を

とつて、味方、攻、つ、以、と、長年、い、し、義貞、軍、小、正成

い、し、義貞、謀、有、て、軍、攻、以、つ、大、拍、の、意、有、て、意、有、

惜哉、一字、攻、も、不、書、文、攻、も、手、以、つ、て、善、悪、の、道、理、評

ふ、以、直、の、義、曰、木曾、軍、攻、得、多、し、と、い、ふ、に、義、経、小、も、

亦、討、ま、か、つ、し、の、以、と、正成、曰、軍、の、勝、負、や、つ、て、軍、の、善、悪

攻、每、以、多、し、以、漢、楚、七、十、余、度、在、合、戦、小、高、祖、每、度、利、を

争、つ、り、も、韓、信、張、良、の、謀、化、を、軍、攻、以、多、し、に、以、つ、の、以、

ら、う、く、木曾、の、義、経、小、討、ま、か、つ、し、其、積、也、以、罪、す、時、何、事、ハ

軍、の、拙、小、い、ふ、と、義、貞、曰、急、く、有、り、木曾、積、悪、あ、る、の、世、何

正成、曰、急、が、学、ん、て、至、る、あ、ら、び、生、ま、る、る、不、く、聖、賢、の、教、以

て、道、理、攻、行、ハ、其、急、善、と、い、う、道、理、と、有、て、行、ハ、其、急、

悪、と、い、う、盜、賊、の、人、也、以、奪、た、希、代、の、謀、攻、を、お、見、た、ま、つ、以、

木曾、と、道、理、と、い、う、善、悪、其、意、悪、と、い、う、関、白、と、い、ふ、人、と、い、

時、是、時、法、師、ハ、人、威、冠、の、末、子、で、成、な、ま、つ、以、と、い、ふ、事、ハ、木曾、

以、て、関、白、と、い、ふ、人、來、公、小、と、い、う、事、ハ、以、他、と、い、ふ、人、と、い、

此、之、の、木曾、也、其、思、以、胸、中、攻、送、を、以、て、悪、の、項、と、い、ふ、と、知、り、ん

小、い、悪、行、ハ、以、以、士、の、色、小、め、け、る、ハ、耻、と、知、て、後、羽、の、軍、ハ

巴、城、之、兵、何、と、い、ふ、と、義、経、ハ、木曾、と、い、ふ、も、ん、多、に、惡、量、也、と、い、

ハ、

一と直義曰義経より本曾の思量は少く不なるは正成
の心も一學一字を以て半身を以て有り義経は
兵書佛典もよく知るはれも半身を以て有り義経は
生得の才は思ひ義経はまじく長年曰本曾大将
の器有るは正成の謀と軍とを得る言は大将の器は
有りやと語り置は義貞以下も其の感に
一本東鑑に頼朝奥州泰衡國衛討人と評義経は多に
泰衡の既迎の家人大洞三郎といふもの小山判夜朝政の
りて反論をけり重賞の泰衡討て鎌倉の事をも
んとし朝政曰彼人非人といふ事も同意は恥を
事とも是成の心はたあはれと頼朝の事も頼朝の事

く我といふは少く朝政の意に任ずるはとて大洞の討て推奉
勢のつて泰衡の方へ分のの家人の事密事告し
つたは少く大洞の事討て大驚ふ逃失を泰衡の事

正成評頼朝大将徳あり朝政臣下義経泰衡不義者ナリシカニテハ悪將器ナキモ

從頼朝敵味方の事討つけりしをいふは
足利直義正成の對して曰右の人君皆匹夫の勇気
本とせし其故は佐々木権原の宇治川の先陣無各
平山の一谷の先陣等皆瑞武右の勇にきて人討つ
るは勇の次用多に少くは正成曰佐々木権原無各平山
の勇は瑞武の勇に思ふも志を頼朝の勇に思ふは彼中人の
者は何も下駒し下者なりは物多に牙合は惜ま
士年小先達と戦はし頼朝大将の器ありてよく人

敵の鎧先我巻の中流程ふ返り勢を放つ時討つる

朝倉義景家士

貞柄十高直隆の大太刀越前千代薨有國兼國々々
其に鍛造五尺八寸太刀と名づく僕従四人少て
荷ふるの次而太刀の太刀守有るも嫡子十而直基甫之

大坂の後五月六日井伊家の庵原助左衛門息主従等
身先を以て此村長岡守陣へ逃れ敵と別組の子を以て
危きえと云ふ親助左衛門乗舟して至親御成は是に
すまじきと聲をけて下あつて至親の力以て脇指御成下
り指通しつる也至親の家へ蒐擲て敵引つる至親

小首取をせり横地修理西郷伊藤も是に大に感
大脚所へ申上りし事御感斜り小首取も是に感
幼少の子眼をめて敵小組と云ふ事親と云て助左衛門
心ならずやと尋ねし助左衛門聞て誰とても子に便なるもの
はてしなくと云ふ事

慶長八年十月廿日行年六十歳安藝
廣嶋三病死夫實山麓三葬今現存

可兒吉長への感状なるよし
其方今度濃州岐阜合戦之砌進先陣合鎧事廿八度
捕首敵廿騎言路道断古今無例之至卓摩利支天
之再誕動肝膽訖仍為前賞五百石宛行儀弥可願
戦功者也仍感状如件

九月廿日 福嶋 正則判

可兒吉長とのへ

毛利元就ハ毎年正月元日の早天にも水うのいふ事して
東京に向き暫く懸座したるなり或とし迎替の常座際
も右座出て元日也脚社儀代召上り多振とも何れも
危角の返事とも三座はす其後兩度もて存心と云ふ事
まゝ元就その座立去らざる心角取置出さず此元日
彼の事道理知る候との事と云ふ事と云ふ事
唯謹て兵多し元就曰ハ世の愚なる者ハ元日此れ一昆布
わら栗成りて屠蘇酒を汲壽命長穂子孫繁昌なりと祝言
傳き慮分し我今云と云ふ元三八年の始月の始日ハ
宣の一天より起て一年中の工更此の事と云ふ去年此
今年此思ふに東出ハ五穀豊饒多し民も其事成えり

に兵乱發ても軍糧少り餓死者多し西國ハ早損水損
少く飢多し色々もハ万民安堵の思成候事候と云ふ兵亂の
危に臨事とも艱難の救い少き事候事候と云ふ今年
万民救ふ事候と云ふ思成候事候と云ふ又召使の
諸士へ云ふ事候と云ふ事候事候と云ふ他候恨成り我も又非
此の事候國家安全の用意候事候と云ふ事候と云ふ事候
上下ともに當惑なきやうに賞格する候元日の祝と云ふ事
候事候ハ一年の計ハ春に有り一月也計ハ朔日有り一日の
計ハ鷄鳴日有り一生の斗ハ勤事有と云ふ事候と云ふ事
伊勢國月具教卿臣示橋七九而し云長力の名人今致有無
之と云ふ事候事候の名人仕合の事有り示橋ハ萬葉集に

つたに鉢巻をむすしと云わに長刀也又三尺柄ハ西尺有奈
 以持也其有冬久ハ半弓小鳥乍一と云持也去程ハ
 七九節ハ三十間斗柄或階多長刀と水車に廻し振て
 のり当との孔半電光の擡すことと云つたことハ九柄
 中ハ九柄ハ八八八有毎々ハ半弓半弓半弓半弓半弓半弓
 て見原より更に矢の通多也ハ透洞ハ半弓半弓半弓半弓
 たる長力カれと思え云と云て何合也ハ亦云ハ七七八間
 少ハ半弓半弓七九節今ハ半弓半弓半弓半弓半弓半弓
 と振多ハ有毎々ハ半弓半弓半弓半弓半弓半弓半弓
 と射多七九節えたりと云ハ矢ハ二ツハ成て兩
 方ハ不花ハ見物の人ハ半弓半弓半弓半弓半弓半弓
 何ハ半弓ハ二の矢来て七九節ハ半弓半弓半弓半弓半弓

射込られ長刀の... 毒... 其時見物... 二日... 量... 鳴...
 射... 不感... 多七九節... 矢... 振て... 療治... 云... 後...
 平金...

武島松山の城... 北条氏康... 武田信玄... 兩藩... 攻... 九... 信...
 の若竹... 米倉... 次郎... 鐵炮... 振... 胸... 血... 落... 今... 死... 人...
 河... 草... 馬... の... 糞... 水... 注... 入... して... の... 血... 下... 流... して... 何... ぞ...
 世... 以... て... 即... ち... 之... を... 呼... び... 今... 誠... 惜... 牛... 馬... の... 糞... まで... 飲... ます... と...
 云... 々... 尻... 上... の... 取... 付... け... 置... きて... 吾... び... して... 一... 子... 能... 取... 其... 利... 甚... 大...
 亦... て... 流... 石... の... 房... 取... 付... け... 置... きて... 右... 方... 程... の... 深... さ... 何... ら...
 即... ち... 何... ぞ... 此... 事... 也... 云... 々... 信... 玄... の... 目... に... 五... 寸... の... や...
 公... 之... け... 何... ぞ... 六... 何... ぞ... 七... 能... 取... 付... け... 置... きて... 功... 甚... 大... 矣... 乎...
 云... 々... 一... 段... 氣... 味... 何... ぞ... 云... 々... 馬... 糞... まで... した... 水... 取... 取... 二... 日... の... 一... 段... 氣... 味... 何... ぞ...

と譽てよりの河をらぬに非は是非をく彦次郎も吞り
ゆきた朋の血下海深しゆきとも平念志り信云とま
大に感せしむる

矢田作十郎り常名氏武田信玄関及云多し彼り形卷
寫し事し一思ふ河三河につらさる

神祖聞長作十郎りこの長たうらむ者多し座せ置
以寫さるべし立安山見す入りあを仰せまらる

秀吉筑紫陣に農前出歳兵衛青く多し蒲生氏の家臣
西村左馬之軍令以托し方多しゆりて功名多きも氏ゆて

勘當せし其後氏ゆの惣支長園越中守及以頼と成る
以頼も多し許さる幸地に踊る其翌日氏ゆ西村し事云

とよみんとのたまひり西村村あやう主人といふに的業の
翌日今我試んよ事ゆへに北りともくも昔持た

ふハ氣色や損せん自らゆ怪唐者といふ人しゆハ昔持
一生の浮沈したに究りて思堆さけあ人ハ名も唐者
煙唐人といふて月氣もさるる志り氣色損せんとい

自決して別座席にたると其後けい山陽多氏ゆ無念あり
ゆ今一番と力足成踏て立向ハ安道習の何事ハ西村
かせとけい云ハ氏郷の機嫌や悪り毎とむる西村

小月づきし息吹のけいけい揚てえ物ハ守りあや出度
負ハ多しみ論るえい今怒にゆき觸るとあも月陰死
又勝りり氏郷ち笑云汝り力ハ我に倍せると翌日又加増

の録以揚りたり

大岡秀吉諸大名集め兵卒の折ありて曰織田上野の兵五千

備生兵郷の信をて一万騎牙て合戦ありん何事もハ行方ハ

ウさる事と有に皆し返る出さるる多に秀吉仰らん

我ハ上野の兵をて其故ハ備生より胃の首を取

らん其内ハ必氏郷の首ハ何多き上野の首ハ有ハ

之何ハ甲ハ大物の首とせしに當方負けり仰らん

事ハ氏郷をり過る多大物あり世にや仰らん

建禮門院入水せり多武深武の諸兵引上下奉

大將の船屋形に移奉義經無慕のこころ降らん

降人とも武深何れもはるハ利便の思をせよあきけり

豫類中云

たすし放播州布衣の浦少く船にりて女院のなむらハ

我が事くも國母の号ありてり女院の事ハ青雲

茂如の多之れ多に宗致の正ハ橋大菩薩の権威ありハ

其上はて途へし事とも罪多きとの守りハ義經

畏て鎧の白鎧の鎧座より都中への道千比翼の物あり

事ハ其後或書に於て偽多し事ハ利害の事あり

事ハ其後或書に於て偽多し事ハ利害の事あり

漢楊尅有言曰移都改制天下大事故盤庚五遷殷氏

胥怨之曰大率徳天子遷都論ハ眼前の平安城あり

右の皇都の趣試知らざるもの

仙臺侯入都て帝被為わん武藏坊毎度亀井重清長日

くすくすらん覺

武藏坊每慶長口

一國重作長鈕貳尺六寸八分 一中心長三尺朱銘有

一鈕銀臺金掛 一切羽金無垢 一目釘草赤銅銀小縁

一胴金ニツ水込其銀 一大刀打金地千段卷一柄白徑長定五寸

一石突鐵銀香頭 一鞘黒塗 一袋緋羅紗中結黒草

龜井重清長刀

一長鈕壹尺六寸七分 一中心長壹尺七寸金銘有一大分打黒塗千段卷

一鈕金上無垢下程アリ 一切羽金無垢 一鐔赤銅

右寶曆八年五月六日仙臺留守居飯淵三右衛門 田安一持系

享保中萩生惣七郎 被仰牙清人朱佩章 柳尋之書

海見久史取次朱佩章 答之書 差上依寫

朱佩章答之賞書

一紅衣砲發貢共石火矢ナリ其制同フ少シ大小ノ差別アリ

大ナルヲ紅衣砲トシ其次ニ發貢トス

一紅衣發貢トハ紅衣砲ト發貢トヲ合メ云ナリ紅衣ハ紅夷ナリ

清人夷字ヲ忌テ衣ヲ用ユ

一金邊ヲ鳴スト云ハ銅羅ノ縁邊ヲ敲ナリ

一錫敵龜ハ錫ヲ作ノタル鉄砲ノ胴葉入ナリ其形敵龜ニ似ナリ

清人モ用ル者アリ

一冠頂ハ冠ノ天邊ノ鍔ナリ涼帽ハ夏秋ノ帽子暖帽ハ春冬

ノ帽子ナリ其制差別アリ

一涼帽暖帽之圖先年差上ハ通ル

一頂圈ハ官女ノ項ニカクル鍔ナリ

- 一圓月六帽子ノ天邊ノ座ナリ其欣圓ニシテ錢ノ大サノ如シ
- 一明轎暗轎別紙ニ圖アリ
- 一兵拳別紙ニ圖アリ
- 一心紅銀朱事紙張ハ料紙ナリ
- 一馬ノ飼料ニ空草ト云ハ藁ニカリノ事ナリ草料ト云ハ藁ト豆ヲ合メ云ナリ
- 一潮銀ハ銅ヲ加ヘタル伍悪シキ銀ヲ云ナリ
- 一撒袋ハ弓ヲ入テ腰ニ帶タル袋ナリ
- 一戩ハ等ト同シ銀科ナリ秤ハ斤量ナリ
- 一偷飢ハ人參トトラ盜掘ルナリ飢ハ音胞空ノ字ノ意ナリ
- 一喇嘛僧ノ事先頃申上候通ナリ

- 一吉ハ蒙古王爵ナリ裕布囊ハ蒙古ノハム爵ナリ
- 一格々ハ宗室ノ女ナリ漢語ニ姑娘ト云如シ
- 一精奇尼哈番此一件ハ皆清朝世襲ノ爵名ナリ譯語未詳
- 一馬法樓軍共ニ庫ヲ守ル番人ナリ其内馬法ハ小頭ナリ
- 一欽部ハ官名ニアラス欽件部件ト云事ナリ大清會典ニ見ル
- 一顏曾孟仲ノ仲ハ仲田ヲ云
- 一檔ハ滿語ナリ帳面ヲ云
- 一雲南ノ内妙安府ト云ハ未聞若シ妙安府ノトナルヘキカ清朝ノ
- 一姚安府ハ明朝ト其地相同シ
- 一毒縣章京 章京此言武官毒縣章京即是領大毒縣之官

一噶布昂邦 噶布此言射箭昂邦此言大臣噶布昂邦
一即是管射箭大臣

一噶布什賢 噶布此言射箭什賢此言健勇噶布什賢
即是管射箭之官也漢銜未詳

一擺牙刺 漢銜及譯語未詳
一蝦 或作下字 漢銜稱為侍衛譯語未詳

一法一化大 此言管王府家務之官漢銜稱為長史
一包衣大 包衣此言家裏大此言頭目包衣大是一家

管事的總管官也
一布打衣大 或作布大表大 布打此言飯衣此言之即是管

飯食之頭目乃是廚房官也

一茶衣大 乃是管茶頭目即茶房官也

一阿木孫章京 阿木孫此言祭祀器皿是管祭祀器皿之
武官

一阿敦大臣 阿敦此言馬圈即是管馬圈大臣也

一阿敦大 即是管馬的乃是馬房官

一衣杭大 衣杭此言牛即是管牛圈之官

一法克師大 法克師此言匹夫是管匠人的頭目也

一烏林大 烏林此言財帛烏林大是管財帛庫之頭目

也 烏林人 烏林人即是管財帛人

一撥什庫 旗下一十名兵有一名撥什庫即如管隊

百總之類也譯語未詳

存者茲生想七節同日之內佩章貫以介之谷而座

其凡十一條矣本馬子本擲頭前舍林後金花之儀ハ

貫石之由中山想七節同日進進仕末之上

正月

深見久矣

大清乾隆帝南巡之始未聞書

南巡下北京より浙江江南ニ巡ルヲ云

正月九日北京發駕皇太后并妃嬪宮女等百餘人其外隨駕

之大臣數百人護衛之勢拾三萬人附添二月廿日江南之內蘇州

到着五日逼留同廿五日浙江口到着七日逼留其間諸省

之道筋民間之者共拜見以免其苦教百里之間極之

造物燈籠屋臺亦持上下萬民銘之象二二之香案ヲ設

色之鑄鼓以聖駕以迎帝甚大悅余其詞之者其

織物并金銀之秀貂鼠皮亦賜猶又七十以上之老人銀

梅以養老之三字以鑄牙之銀一枚完給之八十至九十者

若六格別織物而亦相添給之百者之者二百歲之三字以

付石門之達也銀六百日完給之其意老老之廣也

承之凡名山勝景遊遊之師馬召也所之詞制表之詩賦

畫亦有之而燈籠船頭船釣船鴉船亦有之想之道筋

種之也物有之甚賑之友事之尤北京之江南浙上之千

余里之洞唐之高山曠野乃之幅二丈程之毛經印發諸省

文武之官人救十萬人送迎有之山東江南浙上之地月巡幸

之道筋一年之年貢運上之故聖駕駐驛之所新

行宮河邊送玄母 皇太后黃緞子張山惠召連附席
宦女皆騎馬侍從 侍從皆其高甲子 拜見以紫
廿三日 帝之行列 八路 行程九二十里 程相隔 巡遊有
三月十九日 蘇州 還駕 五月中旬 滿柳 由當年入世
船至 共中 後上

辛未七月

塔尾山如意輪寺

吉野山勝寺在
坤山谷ニテリ

後醍醐天皇御目心乃

湖水像 其厨子の扉に吉野

熊野の畫圖

有るに宸翰の御讚の詩あり

晴岨月前為教主金峯嵐底現藏王班荆禪客安居砌
縉素群焉滿願望慈風扇境四流渴惑霧晴心六度差

碧樹集雲飛鷲嶺 黃金穀地契龍華 風月澄心文道祖
火雷宥念法院尊 日藏聖感瑞夢處 大政天為教海繁
兩山梯峻古仙跡 四海舩浮權化神行積僧祇鑿 末世
威政鬼類縛其身

吉野 貝原村善徳寺境内小安満了願墓有

諭告法制十七條

元和九年七月十七日
神祖與関白昭實高議是冠族法制
大将軍兼二條城奢傳奏乃公卿

其一 天子藝習學問為第一 不學則不明古道而
致大平者未之有也 負觀政要既有明文 寬平遺誠
曰雖不研究經史亦可誦習 群書治要禁秘抄曰
和歌自 光孝天皇未絕 雖綺語而我國俗習也不
可棄損 則宜專學之 其二 親王班三公之下 何則

右大臣不比等班舍人親王之上舍人親王仲野親王贈
大政大臣穗積親王准右大臣皆一品親王以後所贈大臣
然則為三公之下斷無可疑前官大臣三公宜班親王
之下在官之時為親王之上辭表之後可班次座其次
諸親王但儲君不在此限前官大臣再居閑白職則可
以攝家位次定班其三清華大臣辭表之後可班諸親
王之次其四雖為攝家而非其器者不得任三公攝閑况
其餘乎其五應器之人雖年老而不得上三公攝閑之
辭表但雖有辭表可再任之其六養子者蟬聯陸續
可用同姓攝家外戚美家督古今絕無其例其七武家
官位可為公家見任之外其八改元可用漢土年號吉者

選定至他日習禮既熟則可遵 本朝之前規其九

天子礼服大袖小袖裳脚紋十二象 諸臣礼服 脚袍

塵青色帛生氣脚袍或脚引直衣脚小直衣等事

仙洞脚袍赤色椽或甘脚衣大臣袍椽異文小直衣親

王袍椽小直衣公卿著禁色雜袍雖殿上人大臣息

或孫聽著禁色雖袍貫首五位藏人六位藏人著禁色

至極膳著麴塵袍是中下脚服之義也晴時雖下

膳著之袍色四位以上椽五位緋地下赤衣六位深綠七

位淺綠八位深縹初位淺縹袍之紋馬銜唐草輪無家

以舊例著之任槐以後異文也直衣公卿禁色直衣

直衣始或拜領家任前規著之殿上人直衣羽林

家之外不著之雖殿上人大臣息或孫聽著禁色
直衣布衣直垂隨所著用也小袖公卿衣冠之時
著綾殿上人不著綾練貫羽林家至三十六歲著
之此外不著之紅梅至十六歲三月諸家著之此外
平納也冠未滿十六透額帷子公卿自端午殿上之
自四月酉日賀茂祭著之此通札也其十諸家昇
進次第家家可守旧例申達但學問有職歌道
可專學之其餘積奉公之勞者雖為超越應蒙推
任推叙下道真備雖為從八位下以有十藝之譽拜
任右大臣最為眉目螢雪之功其可忽諸其十一閑白
傳奏及奉行職事等所命堂上地輩有違之者

宜處流刑其十二定罪輕重宜據名例律其十三攝家

門跡宜班親王門跡之上而前官大臣必班其下以比准之但

門跡非棟葉者不可有親王 宣下門室之崇厚可

視其人歷考前規法中親王希有之事也近年櫻多甚

無謂也攝家門跡親王門跡之外之門跡可為准門跡其

十四僧正大正門跡院家可守前例至凡民則器用卓板者

雖間任之可為准僧正但國王大臣之師範不在此限其

十五門跡者僧都大正法印任叙院家者 僧都大正少

律師法師法眼可遵前例任叙但如凡民本寺推舉

之後可選其器以及引之其十六紫衣之寺住持職
前蹤希有近年櫻 新許之且乱臆次且汚

官寺甚不可也向後選其器局戒臆相積有知德之
譽者方可汲引使之入院其十七上人號者本寺選
碩學者差別正權而薦舉之則可降
但其人佛法修行及二十年則可為正年序未滿
則可為權有濫競望者可處流別
家忠日記 松榮紀史

係元平作物語人多武峰の公喻僧正一本源喻つる
其後勘解由小路鳥丸久兒若とふ因縁舞の上
曲節つゆ多大納言藤原經実つ詠にてとる多
二條院の奏聞執事一本兼室時長と云ふ非く盛衰記と云ふ久兒若
とふと云ふ

慶長五年十月二十九日 神祖疾疹將士登

城賀之方是時 世子與參河守秀康弟下野守
忠吉皆在大阪一日 神祖召大久保忠鄰曰三子孰

為適嗣忠鄰曰 世子佐望已重臣未嘗見其過失
不宜動搖 神祖默他日召井伊直政神原康政

本多忠勝平巖觀吉本多正信及忠鄰又問之正信
等不敢輒對退而議其可否正信曰參河守殿重武

絕倫宜為家嗣直政忠勝親吉各陳所見忠鄰曰
三公子皆 閣下所生弓馬之藝非所論也

世子智勇兼備付託基業非此則不可康政曰誠如
子之所言既而六人入見 神祖先使正信弁言

正信對如前議次問忠鄰亦如前議 神祖使與

正信論難正信曰參河守殿為適嗣斷無可疑忠鄰
固執前議曰哉乱克敵勇武為先平足天下非備
文德必不可也臣事世子歲月既久非無保佑之私至
於授受基業則國家長久之大計豈挾私有所偏重
哉因探懷中誓書上之 神祖曰卿等且退吾
將思之經一兩日又召六人曰卿忠鄰所言有理吾繼嗣
已定矣六人同辭曰鈞命甚善拜謝而出家嗣遂定烈祖世續
創業記卷之四記新度長記及開原大
度長六年八月權中納言上校景勝與參河守秀康
有舊及其黨敗於開原大沮與其將直江兼續議
遺書秀康乞降 神祖秀康以為石田伏誅景勝
失勢今乘其弱攻不可謂武長尾世家也滅之不仁

乃請 神祖含容之

神祖釋其罪景勝大悅下略

同書 同十二年下未閏 哉州大守正三位前權中納言兼三河守
秀康卿薨于越前北莊城年三十四 秀康 大將軍
之庶兄數更戰陣智勇兼備人皆畏憚之長子忠直
年十三時在江戶 大將軍命使紹封亟歸哉前
蒞政 下略

自信長公秀吉公大政所口被遺後脚直書寫

おる執事
こしめてこしけさん
あうちやく
色くうはく

人麻呂塚略考
大日本史曰顯昭法師人丸勘文云藤原清輔嘗過大和聞故老
言添郡石上寺傍有祠号治道社祠邊寺號枿本寺是
人磨所建也祠前小塚名人磨墓清輔往觀之所謂枿本

りしすも...
もてな...
らしい...
なりみ...
御朱平

夜...
とんか...
の

寺礎石僅存人麻呂墓高世尺許因建率都婆勒曰枿本
朝臣人磨墓顯昭按人麻呂没于石見宣移其遺骸於
大和耶如平惟仲率千宰府移其屍于洛東白河
此後...
般富門院左衛門人瓦墓...
権中納言長方

書...
藤原清輔朝臣家集及...
世...
道遠度在大臣雲隆云古野清日記

天文二十二年二月廿六日
紹巴業内...
天...
世...
道遠度在大臣雲隆云古野清日記

しるべき云葉ハ華に如きの洋もどりなり其の残る 瑞雲

猶葉和并葉権僧正範云々

芳野山云々 瑞雲云々 人の名云ハ昔々も云々

又鴨長明無名抄云開塚云々

柳本講式にも身籠りの云々

可惜可悲云々

諸葛武侯與兄瑾書曰瞻已八歳聰慧可

愛嫌其早成恐不能重器耳 瞻字思遠

常光院曲既智度入道云々

のうちに雅前云々

又和の川音云々 山城の云々

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る 昔々の云々

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

のあひ書て出さる 智慮入る

瑞山の高きは三丈尾流の波舟に早く方子に虎山
ありて不遠成多し海辺の山に幾もしとす
盤石多山崩岸をこへし常海わらへしと知る
鐵炮筒長三尺二寸の洞銃目一丈つとす
上六十間の敵はよく打たるべき事しよえし
のむしも者かもしよえしとす列金はくはひ
かき方よし何れをすれえくるし臺尻にハ
金見のつとく張べし急な時杖にともふし
火繩城の穴常しよも一倍も深くして其奥に油紙
張り意はべし
統率のつと方信玄家には毎日夜十放つての積

に何れに鎌信家に六晝夜十五放しの考にて二口宛の
何れに大坂籠城のつとに毎日夜一人十二放と定む口葉ハ
一放に五厚との法にて初めは五口切つとす後少し
二口少し一日にも後すしと云り
成功者毎日夜十二放の法
察愛中ナケル

一三軍一和して諸兵上法は法畏き大将の令に敬むお喜ぶ
に敵破るる中し玉銃は多に勇氣にむかひ
とききと云に在實し其頭の賢なる威勢大志く
武略何多し或は以ては是は勝も志すし二軍中
救て敬む諸兵不和は齊は未と思ふに敵の強は
いしに在張るに石古鐵心し月夜元を耳と

未行していりし怪物語り申すに諸人未疑の
白起て上は法度以畏きし大なる重き多し弱の微之
三軍中の能齊移して陣の勢固際く一疊の(高)
大風利の利不煩て油断をく旗旗前にあはる萬鳴物
の音清に人聲地の割に神明の助あり大勝のありて
四行列用の旗旗乱て未送く大風雨利不煩て
油断に諸兵懼きて勢氣属以軍馬騷かしく兵具
折損に鳴物の音聞て人声空に割に大敗のありて
五大寒風雪の付未明に押寄せし難所は越ある
と上下の病し者之復後ら後ら虚く六火熱の
時分遠路に押行飢渴たる虚く七長陣兵糧乏

三く下し或怒或怒難説に多ふ八討へ八小
行軍營陣小下し散乱し其頂に從ふ或人馬
五煩或四方より援兵を討へ九道遠る
日暮上下勞き倦て食せず胃が解て從は
小息八討へ十諸兵大將は逃し其下右和ふ
去て進退に自由なり多し敗軍の右や十一陣中
騷動に諸子の前後左右に顧み人馬の足並極
さるハ後疑く十二敵兵進あるも前より
入るに鎧先あり陣中より見えて見ゆるは
先成也とて多し十三能く利ありて進ゆ
戦はさるハ臆病の志あり又退りて協はさる

不返退さず不智之十四、柄武具或杖小甲或甲下、
仰き足らぬ頭くさかへに立付し、
十五野陣或は行列の時、諸兵其頭をたつ、
以思くにかへし、
十六行陣諸備の中に
思く、
十七馬の嘶き口た
切く人聲口した喊し、
取海原或来むる、
諸兵走く急に水飲、
虎常、
十八遠路或押行き、
十九鳥獣
走る伏兵を横入り鳥獣の

夜集り、
夜廻り頻に呼ばる、
猥ら、
奇正或知る、
河、
小執、
前、
止、
音、
又、
義、

攻て右に備ふ戦好む前後の備も亦此意なり
三三九左に退き右に備ふ味方の待て左右
前後の備 三十備成金とて取多進きたる前鋒地
村に子聞音以上は戦好急なり世一揮来り敵武者
分ち出入有て槍前下り立物前に傾きたる強進を
人馬是並動ず陣中よりくろくたる備地制后
正安とて諸兵大將に重んずる世二味方の備は
小成り敵軍行列正鋪と通した小荷駄備ひし
見えは戦好むと知るし如流の付は地形の戦
はくし世三敵軍より先物見たりし世四戦
見中又後物見たり見合せて次ありは後の備

はる其後必大將より世四敵の小なる鳴物
或る多は時合に大なる試舉る謀ありは
世五上より下は是し恩賞なり正なる私を刑罰
明にして事代柱下より上は宗尊の勝り後
分り世六主君の云に切らぬ諸役人昔人に勝れ
るは利ありと多し世七強昇の正とて堂へ
其備陣をた堂とて廣文に立て強きたる處で撃
つと勿事世八堂に通路ありて援兵ありは援
撃より多し世九進を静かに階難に持む
はく遠より戦好むし人の進んば御すは
四十其形より易に敵の利ありて味方の謀は

四十一ヶ城に於て險難の山路に備へ其將功者に於て勝れし
と知へし四十二ヶ城に於て備へ其將功者に於て勝れし
は代りて四十三ヶ城に於て備へ其將功者に於て勝れし
未備に於て敗れしは四十四ヶ城に於て備へ其將功者に於て勝れし
半路に於て敗れしは四十五ヶ城に於て備へ其將功者に於て勝れし
如くは四十六ヶ城に於て備へ其將功者に於て勝れし
敗北に於て四十七ヶ城に於て備へ其將功者に於て勝れし
甲八ヶ城の氣出て東に行へ其將功者に於て勝れし
彼へは進退に迷惑して肩を以て四十九ヶ城の氣出て
烟氣の如く及んで其將功者に於て勝れし
若くは傳へし又しは是れ使者の傳へしは四十五

ヶ條の終に於ては右より或是れ迷氣或是れ使者の傳へしは
傳へしは傳へしは傳へしは傳へしは傳へしは傳へしは傳へしは

